

東方英雄面—仮面戦士
達の力を持つ者—

Kurokodai

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

一つの命を終えた一人の子供

彼は死ぬ事を嫌がった

ずっと生きたかった

そんな中、最強の龍神『零龍』が現れ、彼に新たな命を与えてくれた

新たな命を持つて新たな世界へ・・・

自分の考えている作品の中で第1作目となります

よろしければゆっくりして読んでください m (´▽｀) m

目次

今後の流れ	1
プロローグ	7
一章 新しい命を得て	
第一話 始まる新たな生活	17
第二話 神の血を持つ古代の子供	24
第三話 実験の始まり	35
第四話 実験大成功	42
第五話 ヒーローの戦い	49
第六話 青き龍の戦士	69
第七話 清めの鬼	82
第八話 普通の日常	96
第九話 桃玉と姫と月移住	105
第十話 プレゼントと告白と妖怪	118
第十一話 運命の日 人妖大戦	134
第十二話 滅亡の切り札	149
二章 鬼子母神との遭遇	
第十三話 穢れの弾く薬	163
第十四話 生き残りの鬼人	168
第十五話 清めの鬼 vs 最強の鬼	173
第十六話 少年よ、闘え	176

第十七話 戦いの後 | 183

三章 数億年後の世界にて

第十八話 復活した世界にて |

第十九話 とある話 |

第二十話 宵闇の妖怪 |

203 198 190

今後の流れ

どうも、クズ作者のkurokodaiです。

私が投稿している東方英雄面―仮面戦士達の力を持つ者―をお読みになってください、誠にありがとうございます。

さて・・・今、皆さんがお読みになっているこの場面はストーリーではなく、私の設定の説明になっております。

今回、この場面で書くのは、「正義の前世の世界と、諏訪大戦までの設定」です。

まず、正義の前世の世界は、メリーと蓮子が生きている時代、そして暮らしている場所は、東方の世界で首都となっている京都としています。

正義の前世の年齢は11歳ですが、彼の小学校はかなり頭が良くないと通うことができない有名な私立の小学校にしています。

そう設定であると、「その時代では仮面ライダーは、もう放送されていないのではないのか？」という方もいると思いますが、この時代の仮面ライダーはテレビで再放送しているものというようにしていきます。

まあ、YouTubeで金曜に出されているし、CSのような有料番組で仮面ライ

ダーを見て、知ったと言うことになるでしょう。

一応、父親がライダーオタクなので、それで知ったことにしています。

正義が始めてみたときの年齢は3歳からで、今まで見た仮面ライダーはクウガからピルドの18話（仮面ライダーグリス変身回）という設定にしていきたいと思っています。

そのため、それまでに登場したフォームにアイテム、怪人は一応覚えていきます。

アンデットを製作できたのは、その怪人のモチーフを知っていたからです。

続いて剛との戦闘後に行おうとしている諏訪大戦までの流れ

← 戦いの後、旅を続ける正義

← 地上波再び命溢れる

← 伊勢の国に訪れる

← 国に侵入した妖怪を倒して、その国を治めることになる

← 諏訪国について、諏訪子と友好（諏訪子は一目惚れ）になる

← 一体の妖怪を仲間にする

← 大和国から諏訪国に領土の明け渡しが来る

← 諏訪子、正義に共闘を求め

← 正義、共闘を了承する

← 正義、大和に宣戦布告される

← 戦争当日、全バグスター（ポツピー、パラドは除く）、正義はエグゼイドで大和の軍に挑む

← 正義は勝つが、大将戦で諏訪子は負ける

← 諏訪大戦終結

← 正義、はじめての宴会

← 伊勢を大和に譲る

← 正義、伊勢から出ていく

という流れになっています

一応、こういう流れにしていこうと思つていますが、所々が変更されるかもしれません

ん

どうか、暖かい目で見ていってください

それと、諏訪大戦と関係なのですがひとつの情報・・・

シ ■ ■ ■ 登場、正義が一時敵となってしまう
■ ■ ■ 妖怪、 ■ ■ ■ の登場

・ ・ ・ 一部の情報がかすれて読めなくなっています

プロローグ

ここは何処なんだろう？

どうしてこんな真つ暗な所にいるのだろうか？

そもそも僕は誰なんだろう？

.....

(回想)

「申し訳有りませんが・・・息子さんの余命はあと数ヶ月です」

「そんな・・・何故だ・・・(涙)」

「どうしてこんなことに・・・(涙)」

「ご両親の出来ることは・・・最後まで見守り続けていてください。息子さんの冥福を祈るために」

.....

そうだった僕は確か死んでしまったんだ

いつもの様に過ごしていたけれども、それを壊す様に僕の体は知らぬ間に病に侵されてしまった

それからしばらくして僕は歩くことができなくなってしまった

それからは僕の大好きだった特撮の仮面の戦士と大好きな桃玉の様なキャラのゲームだけしかできなくなってしまった

その特撮はパパが大好きだったため、僕も一緒に見ていたら、いつしか僕も大好きになっっていた

ゲームは友達とも一緒にやったけど、次第に病は悪化して、もう観ることもやることもできなくなってしまった

お見舞いに来てくれた友達は皆んな泣いていたなあ

そして最後に・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・

(回想)

「○○○、お前を早く逝かしてしまう俺たちを許してくれ(涙)」

「もつと、早く気づいていればこんなことには・・・本当にごめんなさい(涙)」

「僕・もパ・・パとママ・・・に迷惑か・・け・てご・・めん・なさい」

「もう喋らなくていい、俺たちはこれからもお前の幸せを祈り続ける(涙)」

「そうよ、あなたは私たちの大切な子供なんですから(涙)」

「あ・・・りが・・・と・・・うパパ・・・ママ」

「もう苦しまなくていい、ゆっくり眠ってくれ（涙）」

「・・・うん・・・おや・・・す・・・みな・・・さ・・・い・・・」

僕はパパとママに見守られて、静かに眠りについてしまった
でも、何故か・・・

パパとママの顔が思い出せない

どうして？

でも、もういいや

このまま眠っちゃうんだから・・・

「少年よ・・・目覚めるんだ・・・」

あれ？なんか声が聞こえる

そしたら僕の目の前に大きな蛇？が現れた

誰なの？

「私は零龍。最強の龍神とも呼ばれたものだ」

龍神？龍神って確か龍の姿をした神様？

本当にいたんだ、神様って

「でも、そんな神様がどうして僕の所に？」

「お前はとて不憫な人生を送ってしまった。本来ならお前の家族、友人と共に平和に暮らすはずだったが、運命が変わってしまった、お前は早く亡くなってしまったのだ。」

そうか、本当なら幸せになれたんだ

本当に運命って嫌だなあ・・・

死ぬのも嫌なのに・・・

「だから、お前を冥界へは行かせず、再び命を与えるためにお前のとこに来たのだ」

「え？・・・僕、また生きられるの？」

信じられなかった

再び生きられるなんて

またパパとママに会えるんだ

「ただ、お前の生きていた時代ではなく、古代の世界にて転生されることになる」

「どうして？」

「今の時代での転生は、非科学的なことが起きたとなり、返ってお前を危険にしてみよう恐れがある。だが、古代の世界なら魔法といった非科学的なものも存在するため、まだ安全である」

「そうか・・・」

そうだよね

今の時代はとて近未来が進んでいるから、そんな転生なんてものが起きてしまったら僕間違いない研究対象みたいな事になってしまう

やつぱりもうパパとママには会えないんだ

「まあ、そう落ち込むな。その代わりに、お前の願いを三つ叶えてやる」

「え!? 願いを!？」

「ああ、お前を幸せにするためには、このくらいの事はしないとな」

「ありがとう!」

どうしよう・・・

いきなり願いが三つも叶うなんて

じゃあ、まずは・・・

「どんなものも作れる知識が欲しい!」

「ほう、つまりはあらゆるものを作れるほどのとてつもない頭脳と技術が欲しいってことか。いいだろう、その願いを叶えてやろう。ついで二つ目は?」

二つ目。これはやつぱり・・・

「クウガからビルドまでの『仮面ライダー』に変身できる様にして欲しい!」

「仮面ライダー？ああ、現代の時代にてテレビでやっているヒーロー物かあ。いいだろう、ただし私の力ではその変身する物は作れない。変身できる様にするが、道具はお前が作るのだぞ。いいな？」

「うん！」

「よろしい、では最後、三つ目は？」

最後かあ

そういえば、一度会いたいと思っているキャラがいたなあ

じゃあ、最後は・・・

『『カービィ』も生み出して欲しい！』

僕、一度カービィに会いたいと思っていたんだ

だったら、最後の願いはこれにしよう

『『カービィ』かあ、いいだろう。しかしそれはその『カービィ』という生き物の命を生み出す事になる。これはかなり時間が掛かるがそれでもいいか？』

「うん！」

「よろしい！最後のその願いも叶えてやろう！」

こうして、僕はすべての願いを言って、転生の準備ができた

するといきなり零龍さんが・・・

「あとすまないが、転生した後、私はお前の中に居座らせてもらう」
「え？どうして？」

「この私と一つになれば、お前は人間ではなく半月半神となれる。そうなればお前は強者の一人となる」

「半月？何それ？」

「それは後にわかってくる。では準備はいいか？」

「あ！う、うん！」

「よろしい！ではいくぞ！お前の幸せのために！！」

そう言うとき零龍さんは奥へ行き、すごいスピードで戻って来た

戻って来たと思うと、そのまま僕の中へと入って行った

「うっ！ぐう！」

零龍さんが入りきった瞬間、もの凄い光が僕を包んだ

まるで抱かれているかの様に・・・

.....

ここはかつて地上に存在していた超古代都市

この都市の文明は転生した少年の時代よりも優れており、空飛ぶ車に、床のないエレベーター、動く歩道が沢山あり、まるで近未来都市の様な都市

この時、都市は豪雨の嵐に飲み込まれていた

一度外に出れば、ずぶ濡れになるほどの雨となっていた

そのため、この時に外出する人はとても少ない

そんな中、その豪雨の中傘をさして歩き続ける一人の女性

？「はあ、なんでこんなに雨が強いのかしら・・・」

彼女の名前は八意永琳

この超古代都市においてかなりの地位を持っている

そしてこの都市の発展は全て彼女が科学技術を進化させたからである

そんな彼女は、この都市の貴族の会議に参加して、全て終わり帰宅している所です

永琳「こんな大雨の時に会議なんて、信じられないわねえ」

なんて愚痴を言っている永琳

するとあるビルの端に傘と雨宿りしてるかの様に置かれている一つのダンボールが置かれていた

永琳「何かしらこれ？」

不思議に思い、永琳は置いてある傘を取り、ダンボールの中を開いてみた

すると中には、一通の手紙と頭が永琳のように白く美しい髪をした2歳ぐらいの男児が静かに眠っていた

永琳「え!?!まさか捨て子!?!」

永琳は驚いていた

都市において、捨て子は絶対無いため、この様に無責任に子供を捨てる事にとてもショックを受けていた

永琳「可哀想に……ん?これは？」

哀れに思っていた永琳はふと入っていた手紙に目を向けた

永琳は手紙を取り、中身を読み始めた

『拝啓、この子を見つけた方へ。』

私たちではこの子を養っていくことができなくなっていました。

ですので、この子を幸せにしてあげてください。

どうかこの子、『五十嵐正義』に明るい未来を』

その手紙を見て、永琳は少し同情してしまった

この子を育てるのに、厳しくなってしまうのだろうか

そして彼女はある事に決断した

永琳「私が、この子を幸せにしましょう」

そう言い、男児、五十嵐正義が入ったダンボールを持ち上げ、自宅へと帰宅していった

続く

一章 新しい命を得て

第一話 始まる新たな生活

ここは、永琳の家、というよりも屋敷である

まさに、普通の家族が住む様なレベルのものでは無い貴族や権力者が住んでも可笑しく無いほどの広さのある屋敷

まさに永琳の地位がここに表している

ここでは、永琳しか住んでいないはずだったが今回・・・いや今日からは違う

先ほどの帰宅時に拾って来たこの男児、五十嵐正義と共に暮らす事になった

正義は今も気持ちよさそうに、眠りにについている

永琳「さてと、暫くはここに置いていいでしょう。悪いけど暫く待っていてね」

そう言い永琳は持ち上げていたダンボールを居間に置いた

そのまま永琳は開発のために作業台へと去っていった

〈2時間後〉

作業を一段落して再び居間へとやって来た

永琳は再び、正義が入っているダンボールの中を覗き込む

正義は今も眠っている

正義「すうー、すうー」

永琳「よく眠る子ねえ」

こんなに時間が経つても眠り続ける正義

ある意味で凄いなと思う永琳

すると、玄関から

？「お師匠様、お邪魔いたします」

玄関から聞こえて来た女性の声

永琳は顔を上げ、玄関へと向かった

玄関に着くとそこにはポニーテールをした紫色の髪に刀を所持した女性と金色の髪をし変わった帽子を被った女性の二人が立っていた

彼女たちは綿月姉妹にして紫の髪の方は妹の綿月依姫

そして金色の髪の方は姉の綿月豊姫

どちらも永琳の教え子である

永琳「あら、いらっしやい。こんな雨の中ご苦労だったわね」

依姫「いえ、お師匠様の授業はとても興味深いので今日もいらっしやいました」

豊姫「こんな大雨の中行きたくないけどなかつたけどなあ」

依姫「お姉様！そうやってすぐサボろうとする！」

豊姫「いいじゃないの。依姫こそ何でこんな大雨の中まで行きたいと思ったのよ？」

依姫「ですから！」

永琳「あ・・悪いけど、ちよつと静かにしてくれない」

依姫&豊姫「「え？」」

依姫が大声を上げる寸前で止めた永琳

いきなりの仲裁に疑問になる綿月姉妹

依姫「あの、どうかいたしましたでしょうか？」

永琳「理由は・・とりあえず上がって」

姉妹は永琳の言われた通りに屋敷に上がる事にした

そのまま居間へと続く廊下を歩き、ダンボールが置かれた居間へと着いた

依姫「お師匠様、あのダンボールは？」

永琳「あれが、理由よ。覗いてごらんなさい」

豊姫「？」

二人は置かれたダンボールの中を覗いた

その中には静かに眠っている男児、五十嵐正義が入っていました

正義「すうー、すうー」

豊姫「あら♪可愛い子ねえ〜」

依姫「お師匠様、この子は一体？・・・まさか！誘拐したのですか！」

永琳「違うわ、この子は道中に捨てられていたのを拾ったのよ」

依姫「つまり・・・この子は捨て子という事ですか」

豊姫「可哀想ねえ、こんな可愛いのに〜」

三人は今も眠っている正義を見てはそんな会話を行なっていた

しばらくすると、正義は眠気が浅くなったのか、閉じていた目を開いた

正義「んっ！んっ・・・」

永琳「あら、どうやら起きちゃった様ね」

正義は起きてはすぐに周りの風景を見ていた

その目に見えていたのは、とても広い和風の居間にその中にいる三人の女性であった

その中の一人、豊姫は正義に向けて顔を近づけた

正義「・・・」

豊姫「あらあら、どうしたのかしらあ〜♪」

正義「・・・おねーちゃん、だれ？」

永琳&依姫「「おっお姉ちゃん!？」」

目覚めてから豊姫に向けた第一声がまさかのぶつ倒れるくらいの爆弾的な言葉

その一声を聞いた豊姫は暫くの間、固まっていた

そして動き始めたと思いきや、何故か震えていた

やがて、震えが止まったと思いきや、もの凄い勢いで正義を持ち上げ、

そのまま抱き上げた

正義「んえ!？」

豊姫「あくんもう♪やつぱり可愛いわねえ〜♪もう食べちゃいたい♪」

正義「ふえ・・・ぼきゅをたぶえるのお（涙）」

依姫「ちよっ!お姉様!泣き出したではありませんか!」

豊姫「あらあら本当ね、ごめんね♪お姉ちゃんが慰めてあげるわよ♪」ナデナデ

正義「うう・・・グスン（涙）」

依姫「お姉様!いつまで抱えているのですか!降ろして上げてくださいよ!」

豊姫「さつきからお姉様お姉様うるさいわねえ。昔はお姉ちゃんって言ったのに

」

依姫「ちよっ!私の黒歴史をここで言わないでくださいよ!」

一度収まったはずが再び始まった口論

そんな中、正義は豊姫の腕から脱出し、とある方向へと歩み始めた

その方向の先にいたのは、永琳だった

永琳「あら」

正義「おねーしゃん、だっこ」

永琳「いいわよ」ヒョイ

依姫&豊姫「「なっ!?!」」

まさかの永琳に抱つこの要求をする正義

それに対して嫌がりもせず要求を行う永琳

その光景を見た二人はすぐに口論をやめ

依姫「お師匠様!どうして抱いているのですか!私まだ抱いていませんのに!」

豊姫「ちよっと!私はもっと抱きたいわよ!」

依姫「お姉様は十分抱かれたでしょう!」

永琳「二人だどこの子をすぐに食べてしまいうさだから、こうやって守っているのよ」

依姫&豊姫「(・ω・)」

暫く落ち込んでいた姉妹であったが、後に正義と仲良くなり、二人からは弟ができた様な感覚になったとのこと

ここから、正義の新たな生活の始まりとなるのであった

続く

第二話 神の血を持つ古代の子供

主サイド

どうも、転生した僕ごと、五十嵐正義です

僕は、あの日零龍さんによつてこの古代世界へと転生しました

その後、永琳さんというお姉さんが僕を拾つてくれて、一緒に暮らすことになりました

でも、ちよつと不思議なんだけど・・・

何故か、9歳も若返つたという謎要素

そんな疑問を抱いていると・・・

零龍『少年よ、どうした？』

僕の頭の中で零龍さんの声が聞こえて来た

零龍『私はお前の中にいるため、直接頭へと通じて会話ができるのだ。お前も思つたことを言えば私と会話することができるぞ』

へえ、便利なことできるんだあ

やつぱり神様なんだあ

じゃあ今思っている事を質問してみようかなあ

？ 『ああ・・・零龍さん、聞こえてますか？』

零龍 『ああ、聞こえておるぞ』

？ 『零龍さん、どうして僕こんなに若返ったのですか？』

零龍 『その事か、何簡単な事だ』

え？ 何か事情があつて僕をこんな若返らせたのかなあ？

やっぱり神様は凄い y

零龍 『私の趣味だ。いいだろう♪』 ニコッ

前言撤回

この神様はちよつと馬鹿なのかなあ（汗）

何の理由もなく、若返らせて

しかもそのセリフ、何処かで聞いたことがある様な・・・

零龍 『まあ、その姿では言葉も上手く話せないだが、多くの人と友好を持つためには、まずはその姿の方がいいだろうと思ひ、9歳位ぐらい若返らせたのだ』

？ 『あ、やっぱりちゃんとした理由あつたんだ（^| ^ ;）』

じゃあ何でさっきのセリフを言ったんだろう

これじゃあまるでそのセリフを言ったマッドサイエンティストみたいな性格だと

思っちゃったじゃないの

零龍さんの性格があんまりわかんないやあ

零龍『ではもう質問することはないな』

? 『うん、大丈夫だよ』

零龍『いつでも質問したければ、思い浮かべればできるからな』

? 『わかった!』

零龍『では、新たな人生を楽しめよ、(五十嵐正義)』

.....

永琳お姉さんの家で生活し始めて3ヶ月が経っていた

今となつては、この世界の生活も十分馴染めてきました

そんな中で僕はこの世界のことわかってきました

この世界は人間が誕生する前の世界で、この世界では穢れというものがあるとの事

この穢れはこの世界観では“生きること”と“死ぬこと”だとされていて、特に生き

るために死を作らなければならぬ状態が穢れと言われているみたい

つまり穢れはこの世界での〈寿命〉みたい

この都市はその穢れはないため、寿命も存在しないみたい

さらにわかったことはこの都市の外には多くの化け物や妖怪がいるとの事だった
妖怪といえ、昔の人が不思議な現象そのものやそれらを起こす人間ではない存在
だったと思う

まさか、こんな時代に妖怪がいたなんて思っていなかった

もし僕が妖怪に襲われたら、どうなるんだろう？

永琳お姉さんの話では、妖怪は人間を食べると言ってたっけ？

僕も食べられちゃうのかなあ・・・嫌だ嫌だ

ああ、早くライダーシステムを作りたいなあ

・・・・・・・・・・・・・・・・

そんなある日、僕は永琳お姉さんに抱かれてある場所へと向かっていた
もちろん歩きで

そんな中、周りの人々は僕たちを見て

モブ1「おい、八意様が子供を抱かれていますぞ」

モブ2「シヨタっ子キタコレー！」

モブ3「八意様とシヨタっ子・・・だと！・・・これはアリだな！」

モブ4「まさか隠し子か!？」

モブ5 「あの子、美味しそう・・・」 ジュルリ

なんか野次馬が聴こえてくる

というか最後の人のセリフがなんか怖いよ（涙）

正義 「うう（涙）こわいよお・・・」

永琳 「大丈夫よ」 ナデナデ

とまあ、僕は周りの怪しい目線に耐えられなくなつて泣いてしまつた

永琳お姉さんがなだめてくれるので、なんとかなつたけど

しばらくして目の前にこの都市の中でも大きな建物があつた

正義 「えーりんおねーしゃん、ここは？」

永琳 「ここは月夜見様が住まれている所よ」

正義 「つきゆよみさま？」

永琳 「月夜見様よ。まあ今の貴方では上手く喋れまいから仕方ないけど、で月夜見様はこの都市をまとめている神様なのよ」

正義 「かみしやまなの？」

永琳 「ええ、今日は月夜見様に会うためにここに来たのよ」

凄いや、この超文明の都市を一人の神様がまとめているなんて

そういうえば、前世で月夜見様の名前聞いたことがあつたなあ

確か本当の名前は月読命と呼ばれていて、伊邪那岐の右目から生まれて、天照大神の弟で須佐之男の兄にあたる神様だった

後は保食神のある行いを穢れたものとして殺して、二度と天照大神と会うことが無く、なると言った話を前世で通っていた小学校の授業で聞いたことがある

この僕がその神様に会うことになるなんて思ってもいなかった

まあ、でも僕の中にも同じ神様の零龍さんがいるんだけどね

警備兵「八意様、よくお越しになりました」

永琳「はいはい、お疲れ様ね」

警備兵「ところで八意様、抱えておられるその子は、息子様でしょうか？」

永琳「違うわ、この子は養子として引き入れた子よ」

警備兵「そうでしたか。あつ失礼いたしました。どうぞお入りください」

警備兵とのやりとりを終え、そのまま月夜見様のいる建物の中へと入りました

暫く進んでいくと真つ白に輝く柱に、とても高い天井には光が注がれていてまるで昔

話に出て来そうな王様の居間の様子は空間が広がっていた

その奥にある王様が座る玉座の様な椅子に一人の女性が座っていた

とても高貴な着物を身に付けていて、髪の色は依姫よりも濃い色の紫で、頭には神々

しい飾りがつけられていた

僕の思った第一印象は

とても美しかった

まだ小学生の僕でもまるで一目惚れしてしまいそうな美しさであった

それにしてもこの女性は誰なんだろう？

もしかして月夜見様の奥さんなのかなあ

でも教科書では月夜見様の恋愛は無かったはずだけどなあ

？「よくいらつしやいましたね」

永琳「お招きありがとうございます、月夜見様」

!?

え!?!この人が月夜見様なの!?

僕が思い描いていた神様とはとてつもなく違っていた!!

しかも男の神様では無く、女神だったなんて!!

月夜見「あら♪その子が貴女を引き取った子供ね」

永琳「はい、この子の名前は五十嵐正義と言います」

あ、月夜見様が僕の存在に気がついたみたい

あれ、どうして永琳お姉さん月夜見様の方へと歩んでいるのだろうか？

月夜見「さあ八意、その子をこちらへ」

永琳「了解いたしました」

永琳お姉さんはそう言うので僕を月夜見様へと渡した

月夜見様は僕を受け取るとすぐに抱き上げてきました

月夜見「坊や、貴方の名前は」

正義「いあらしまじやよし 2しやい」

月夜見「そう♪私は月夜見と言います♪」

正義「つきゆよみしやま？」

月夜見「そう、私の名前を言えて偉いわねえ♪」

僕と月夜見様とのやり取りは暫く続いていたけど、

正義「んっんあゝ・・・」

月夜見様の腕の中がとても気持ちよくて、眠気が襲って来た

月夜見様はそんな僕を見てクスツと笑うと

月夜見「眠りたいのなら、ぐっすり寝なさい♪」

そう言われると目が重くなっていき、僕は眠りに入ってしまった

まるでママの腕の中にいるみたいで気持ちいい

.....

永琳サイド

月夜見様が正義を連れて来てほしいと言われてたので、連れて来たけど渡した後のやりとりを見ていると私まで理性が失われてしまいそうな光景だった

正義を抱く月夜見様はまるで聖母とその息子のように

次第に正義は母に甘えるように月夜見様の腕の中で眠りについてしまった

すると月夜見様は私の方を見てある事を言い始めた

月夜見「可哀想ねえ、民の血と同時に神の血受け継いでいるのに捨てられてしまうなんてね」

永琳「!?正義に神の血があるのですか!?!」

月夜見「ええ、この子から今は僅かですが神力が放たれています。この力を持つことからこの子は半人半神と思います」

永琳「……」

月夜見「ともかく、この子は貴女が大切に育ててください。この子はいずれこの国において輝かしい未来に導いてくれるでしょう。私も協力しますので、よろしいですね？」

永琳「……月夜見様の命令でしたら喜んで」

??? サイド

なんだあの子供は？

八意殿が抱かれていたと思ったら、今度は月夜見様にまで抱かれるとは

しかもあの子供がこの国を導くだと？

こうしてはおられん……

早く陛下にこの事を報告して……

なんとしてもあの子供を始末しなくては

続
く

第三話 実験の始まり

科学の力は素晴らしい！正義です

あれから9年も過ぎたけど

僕は何不自由なくここまで過ごすことができた

やっと前世と同じくらいまでに戻ってこれたけど零龍さんが言うには『ここまで成長したが以降はこの姿のままになるだろう』とのこと

うう、やっぱり運命って意地悪だなあ

もつと成長して、かっこいい大人になりたかったなあ

まあ、でもここまでなれば、何でもできるし、そろそろライダーシステムを開発しようか

金属とかは永琳お姉様が廃棄していた残骸から作っていいこう

その第一としてやっぱりあれかなあ？

二つの物質をセットしてそれをレバーで回すライダー

決定！よし早速始めよう

そうやって僕は残骸と自信の頭脳と技術を使って最初のライダーシステムを作り始

めた

.....

永琳サイド

この子を育てて9年過ぎたけど、驚くほどのことが起きたわ

身長は少しだけ大きくなって、頭の髪は少し長くして服装は子供なのに白衣を着ているという普通の子供では着ないものを付けていた

おまけにこの子の学力には正直に驚いたわ

3年前には教え子の依姫たちと勉強していたら、この子は私でやつと解ける問題を僅か10分で解くほどの頭脳を持っていた

しかも、私が今まで開発してきたものも作れるほどの技術力、さらには改良までできるほどの

その2年前には、私の頭脳でも、開発不可能なものをこの子は作ってしまった

何もないところに蛇口をつけて、捻ると水が出てくるものや、相手に光を浴びさせると小さくなったり、大きくなったりする懐中電灯や、仕舞いには紫色の鎧をつけた巨大な人造人間兵器に船首に変な顔を付けてさらに生き物の様な翼を付けた巨大戦艦（動力

源も不明なエネルギー）を作ったりともうぶっちゃけチートじゃないのよ

他にも依姫から剣術を学んだり、結構熱心な勉強家となつてしまった

そんな正義を見て周りの人からは、『第二の八意様』又は『都市の国宝』と言われるようになってしまった

まあそんな話は置いて、今日は正義を連れて新薬のための薬草を採取するために、近くの森へと向かった

この森では最近熊の妖怪が出没し、人間を食らうと噂がされていたが、私にとってはそんなただの噂話に過ぎないわ

でも、正義もいることだし警戒はしておかないと

永琳「正義、この辺では熊の妖怪が出るみたいだから注意しておくのよ」

正義「はい、永琳お姉様」

昔はお姉ちゃんと呼んでいたが今となつてはお姉様と若干依姫と同じになつてしまった（・ω・）

まあそんなことは置いて薬草の採取を始めた

暫くして籠の中には大量の薬草が手に入ることができた

永琳「正義、もうそろそろいいわ。都市へ帰りましょう」

正義「はい熊の〇ーさんが出ないうちに早く帰りましょう」

主サイド

わあー永琳お姉様が警戒していた熊の〇ーさんが目の前にいるく

ちようど良かったんだよね

さつき完成したこの道具の実験いけにえになってもらおう

そう思い、僕は腰から一つの道具を取り出し、それを腰につけると黄色いベルトが巻かれた

次はこの赤とボトル青のボトルを取り、激しく振る

うん、前世のテレビの通り、正常に起動している

よしこれで

正義「さて、僕の実験いけにえになってもらうよ♪」

・・・・・・・・・・・・・・・・

永琳サイド

どうして前に行くの？

貴方は月夜見様選ばれた希望なのに

正義はそのまま妖怪の前に向かった

このままでは正義が危ない

すぐに射抜こうと思った

しかし正義は突如謎の道具を出したと思うとそれを腰に巻きつけた

次に二つの瓶？を取り出して激しく振り始めた

振っている最中に正義の周りに私でもよくわからない物理学の方程式か数学の数式のようなものが現れ始めた

これには妖怪も戸惑っていた

やがて振り終わると、フタを回して腰につけた道具に差し込んだ

『ラビット！ タンク！ ベストマッチ！』

何やら聞き覚えのない音声

そしてベストマッチと聞こえた瞬間正義は道具についているレバーを回し始めた

すると道具からチューブが出て来て、正義の前には赤の鎧、後ろには青の鎧が現れた

『Are you ready?』

正義「変身！」

変身と言った瞬間前後の鎧が正義に向かって閉じ始めた

このままでは潰されてしまう

・・・・と思っていたがそこには正義はいなくなり、代わりに私の服装のような赤と青の鎧と仮面を着けた青年？がいた

その姿を現した瞬間、ある音声が流れた

『鋼のムーンサルト！ ラビットタンク！ イエーイ！』

続く

第四話 実験大成功

主サイド

『鋼のムーンサルト！ ラビットタンク！ イエーイ！』

この音声が入こえた瞬間、僕は自分の体を見てみた

右は赤の手をして左は青の手をしていた

身長は自分よりも高くなっている

そして最後に顔を手で触れて見た

目の辺りには複眼がちゃんとあり、ちゃんとアンテナも付いていた

・・・成功した

僕はついにライダーシステム第一号『仮面ライダービルド』に変身することができた
もう今すぐにでもはしやぎたいぐらいの喜びだった

おっと、そんなことよりも今は目の前の〇ーさんを撃破浄化しないとね

その前にこのセリフを言わないと

正義『さあ、実験を始めようか！』

んー！やっぱ戦う前のセリフってかっこいいや

さてと、僕の初戦始めようつと

僕はすぐに一緒に開発した武器『回転剣銃　ドリルクラツシャー』を召喚して目の前の敵に向かつて走り始めた

妖怪もすぐに攻撃をして来たけど、すぐさま避けてその体に斬りつけた

妖怪「グアアアアア!？」

妖怪は想像以上の痛みに襲っているみたい

そりゃあそうだよ

だってそもそもこれは怪人に対抗するために作られたシステムだもん

生き物を殺すものじゃないからね

でも永琳お姉様を襲おうとするなら僕だって容赦はしないもん

妖怪「ギシヤアアアアアアア!!」

切り付けられてたからか凄く怒っている

その怒りの攻撃を連続で行って来た

でも、ビルドになった僕からしたらその攻撃が遅く見える

一旦距離を置いて、すぐにドリルクラツシャーのドリルを前後に変えてガンモードにした

そして妖怪の6本足のうち4本の前足に向かつて4発発砲した

妖怪「ギヤアアアアアアアアアア!!?」

4発の弾が前足に当たるとその前足は綺麗に消し飛んでしまいました

そして妖怪の顔を見てみると、その顔から恐怖が見えていました

妖怪は目の前の僕に勝てないと思っただらうなあ

さて、そろそろこのセリフを言う時だ

正義「勝利の法則は決まった!」

僕はビルドドライバーに取り付けていた1本の赤いボトル：『ラビットフルボトル』を取り外し、ドリルクラッシュャーに取り付けた

『ready Go!』

銃口にパワーが集まっていき、溜まり終える前に妖怪へと標準を合わせた

パワーが溜まり終え、引き金を引いた

『ボルテックブレイク!』

発砲したエネルギー弾はそのまま妖怪に向かって進んでいき、命中した

命中した瞬間、その妖怪は声を上げることなく光に包まれ、そのまま撃破浄化させた

正義「やったあ♪実験大成功だ♪」

・ ・ ・ ・ ・
永琳サイド

私はもう言葉を出せなかった

私でも倒せるかもわからないあの熊の妖怪を突如現れた赤と青の鎧と仮面をした青年? によつて呆気なく倒されてしまった

そのまま青年? は腰につけていた道具に差し込んでいた二本の瓶? を一片に抜き取った

するとその青年? は消えてその中から正義が出て来た

正義はそのまま私の元へと歩んで来た

正義「永琳お姉様、妖怪を倒しました♪」

永琳「まっ正義! 今のなんだったの!?! それにその道具は何!?!」

正義「ああ・・・ここではちよつと話、お家で話すからちよつと待って」
いつもの様子の正義だった

それにさっきの仮面の青年? はやつぱり正義だったんだ

戦っていた時は、結構大人っぽい感じだったけど、元に戻るといつもの子供に戻って
いた

まあでも正義のおかげで私も無事で入られたから今は良しとするか

取り敢えず、家に帰ってから聞いてみよう

.....

私たちは家に帰り、先ほどの森での戦いのことを聞いた

永琳「正義、さっきの姿は一体？」

正義「うん、さっきのは『仮面ライダービルド』という僕が開発した戦士の鎧にしてライダーシステムの一つだよ」

永琳「仮面・・・ライダー？」

正義「まあ、その辺はここまででいいかなあ？」

永琳「いいわ、っでさっきの四つの道具は？」

正義「うん、ビルドに関するものだよ」

正義はそう言って、戦いの時に使っていた、腰につける道具に二本の瓶？そして剣にも銃にもなる武器をテーブルに置いた

その道具の性質は、私でも開発できないような精密に作られたものだった

これはまさに国を守るためには欠かせないほど、『国宝』と呼んでもおかしくないものだった

正義は一つずつ説明し始めた

正義「まず、この腰につけていたのが変身するのに必要な道具の一つ、『ビルドドライバー』と言うものだよ。そしてそのドライバーに差し込んでいたこれが変身に必要な道具の一つ、僕はこれを『フルボトル』と呼んでいるだよ」

永琳「ビルドドライバーに、フルボトル？」

正義「このフルボトルは一本一本に一つの成分が含まれていて、使用するにはその成分を刺激しなきゃいけないの。だから使う時は、激しく振っているんだ」

永琳「そうなのか、それで最後にあの妖怪を葬ったこの武器は？」

正義「これは『回転剣銃ドリルクラッシュャー』という剣にもなる銃にもなる変換可能武器なんだ」

永琳「・・・ちなみにこれらは何を材料にして製作したのかしら？」

正義「これぜんぶ永琳お姉様が廃棄した残骸から作ったんだよ」

もう私の開発、やめてもいいのかなあ？

この子が開発するものは私よりも傑作なものばかりだし

・・・しばし、私はそのことを考えていた

.....

正義は今は自分の部屋で寝ている

私は正義の姿を見るために部屋に入った

ベットで寝ている正義の顔はとても穏やかな寝顔であった

こうしてみると寝ているときだけ、とても無防備になっているわね

私は正義の頭を撫でてこう思った

永琳「小さかった時は目立つこともなく、依姫たちに可愛がられて育つて来たけど、今も子供のままでけどこの国のためにいろんなものを作っているわね。私を超える頭脳に技術・・・この子の能力はもしかして『あらゆるものを作る頭脳と技術を持つ程度の能力』なのかしら。何がともあれこの子は月夜見様の言う通り、この国に必要な存在ね。大切に守っていかないと」

そう思っていたら私は何故か微笑んでいた

それは今日私を助けてくれたことなのかそれとも別のことなのか

それは私にもわからない

続く

第五話 ヒーローの戦い

俺は非常に苛ついていた

俺は今もの凄く腹が減っていた

いつもならこの森に入って来た人間を喰っていた

だが、最近人間がこの森に入ることが少なくなってしまった

おかげで俺たち妖怪の間でも食^人い物を巡^間って争いが起きた

しかも手に入る食^人い物はとても少ねえ

このままでは最強の俺は飢えてしまう

どうすればいいのか

・
・
・

・・・そうだ人間の街に襲えばいい

あそこなら食^人い物がある

そうすれば俺の腹も満たされるだろう

俺は天才だ

そうとすればすぐに街へ行こう

この時の俺はこの計画は成功する

・・・そう思っていた

あの二人の人間が現れる前は

・・・

主サイド

どうも！ども！ども！正義でございます！

えっ？ちよつと巫山戯すぎだつて？

いやあ、なんか零龍さんが僕に入り込んだ後、零龍さんの性格が僕の体にまで出るよ
うになっちゃんだよ

本来の僕からしたらいい迷惑だよ

まあ、永琳お姉様たちの前ではこんな性格は出していないけど

さて、僕は今どこにいるでしょうか？

〈正義を探せ！〉

・ ・ ・ 5

・ ・ ・ 4

・ ・ ・ 3

・ ・ ・ 2

・ ・ ・ 1

答えは ・ ・ ・

こつこでーす！ここ！ここ！

ふう ・ ・ ・ 巫山戯るのもこれくらいにして

僕は今自分が作った物の一つ

船首に変な仮面をつけて蝙蝠のような翼をした船の中にいます

みんなはわかったかなあ？

そう！僕は今、あるゲームで仮面騎士が所有する戦艦撃ハルバード沈の中にいます

姿も構造も全て原作と同じように再現したものです（撃沈は再現されていません）

どうしてこの船にいるのかと言うと、この船の操縦は一応僕だけが知っているので、

操縦する兵士さんを指導するためにここに来ました

ちなみにこの船を作った後、軍の人たちが「その船！私たちに譲ってください！」って言われたんだよねえ

でも初めに作ったものを、渡すのは嫌だったからもう一機作って、それを渡したんだ
兵士さん達も次第に操縦に慣れて来たみたいだし、良かった

兵士1「五十嵐様！この度はお越しいたきましてありがとうございます！」

正義「やめてよおく♪立派な兵士さんが僕みたいな子供に様をつけるなんて」

兵士2「何をおっしゃるのですか！その素晴らしい船をお作りになったのは貴方様なのですよ！」

兵士3「新しい戦力をくださり、私たちは嬉しい限りです！」

素晴らしい船ねえ・・・

原作でもアニメでも撃沈する船なんだけどねえw

まあ、僕の作ったこの船は例え核攻撃でも少し溶けるぐらいの特殊金属で作ったから撃沈することはないと思う

今の所は僕の発明品に不具合はないと思う

この二つのポトル以外は

兵士4「五十嵐様、その瓶は？」

正義「えっ？あつああ、なんでもないよ」

僕が持っている黄色と藍色のボトル

あの戦いの後、僕は全ての初期フルボトルを作り終えた

他のボトルは正常に動くんだけど、この『ロックフルボトル』と『ドラゴンフルボトル』だけが、動かないんだよねえ

原作では、ドラゴンボトルの力が強すぎて、それをロックボトルの力で制御してやつと使えるようになったんだ

でも僕の場合は、キードラゴンになろうとしても、差し込んだ瞬間、弾き飛ばされちゃうんだよねえ

試しに、『仮面ライダークローズ』になるために開発した『クローズドラゴン』でも試したけど、結果は同じ

もしかして、僕ではこの二つは扱えないのかなあ？

？「おい正義！何黙り込んでるんだ？」トンツ

正義「えっ？なッ何でもないよ『流月』君」

兵士Ⅰ「おい月村！五十嵐様の名前を軽々しく言うんじゃない！」

流月「ええいいじゃねえかよ！正義とは友達だから」

僕の肩を叩いて来たのは『月村流月』君

国の兵士の一人にして永琳お姉様の教え子の一人

身長は初めてあつた時は僕と同じだったけど、今は・・・中学三年と同じくらいまで成長している

学力は・・・まあ察しておいて、格闘や剣術では依姫お姉様の次に強いとも言われているかなりの実力者にして、僕の唯一の友達なんだ

流月「おお！この二つの瓶は何だ？」ヒョイツ

正義「ちよつ返してよ」

流月「いいじゃねえかよ、ちよつとぐらい」

ピカッ

流月「うお!?なんだ今のは？」

正義「!?」

今、二つのボトルが光った

今まで反応していなかったのに、流月君が持った瞬間光りだした

もしかして流月君に反応したのかなあ

原作では、万丈がドラゴンボトルと共にハザードレベルを上げてクローズになったはず

でも、流月君にはこの国の兵士のはずだからそんなことはありえない

でもしも、クローズになれる資格があるのなら……このもう一つのベルトを
ビー！ビー！ビー！

そう思っていたら、突如警報機が鳴り始めた

僕はすぐにスクリーンに何処からの警報なのかを調べた

発生源は都市の入り口みたい

すると一人の兵士がすぐさま無線をし始めた

兵士4 「こちら戦艦ハルバード内！司令部応答お願いします！」

司令部 『こちら司令部！都市に妖怪が侵入して来た！』

兵士4 「本当ですか!？」

司令部 「ああ！数は一匹みたいだが、かなり強い妖怪のようだ！至急現場へ移動せよ
！」

兵士4 「了解！」

無線を終えるとすぐさま船は降下し始めた

でもその間に、都市はさらに被害を受けるだろう

それに相手はかなり強い妖怪だと言っていた

つまり戦いに挑んで、死者も出てもおかしくない

……だったら僕にできることは

ダッ

兵士1 「五十嵐様！どちらへ！」

流月 「おっおい、正義？」

僕はすぐさま通路を走って、外への扉を開けた

開けた瞬間まるで吸い込まれそうな感じになっている

兵士1 「何をされるつもりですか？」

正義 「僕はすぐさま都市へ戻ります」

兵士2 「おやめください！ここはまだ上空です！それに貴方様はこの国の希望なので
すよ！」

流月 「お前正気か！」

正義 「大丈夫だよ、じゃあ皆んな・・・

後は頼んだよ！」

ピョン

ヒューッ！

兵士達 「二十嵐様!!」

ああ、多分皆んな飛び降り自殺をしたなんて思っているだろうなあ
つてそんなことを考えてる余裕はない

すぐに都市を救わないと!

正義「さあ、実験を始めよう」

ぼくはポトルを素早く振り、ドイライバーに差し込んだ

『ラビット! タンク! ベストマッチ!』

『Are you ready?』

正義「変身!」

.....

依姫サイド

まさかこの国に妖怪が侵入してくるとは

しかも奴は上級妖怪の類に入ると言うサイクロプスだった

幸いなことはまだ死人が出ていまいと言うことだ

だが奴を放っておけば必ず死人が出る

そうなる前に、何としても浄化しなければ

依姫「生まれ！穢れ妖怪め！」

妖怪「誰だ？この俺を止める奴は？」

依姫「我は綿月姉妹の次女、綿月依姫！穢れし妖怪よ！この国に侵入したことを後悔しながら、浄化されるがよい！」

私はすぐさま奴に斬りかかったが、さすがは上級妖怪。あまりダメージを受けていないようだ

奴は持っていた棍棒を私目掛けて、振り下ろした

すぐに避けたが、振り下ろされた所は小さいながらクレーターが出来上がっていた。少しでも避けるのが遅かったら、私はそこで終わっていただろう

奴はすぐさま次の攻撃をしようとしたが、私の後ろから無数の光弾が奴を襲った。妖怪「ウオツ！」

後ろを見るとそこには、軍を率いるお姉様の姿があった

お姉様はすぐに私も元へと来た

豊姫「依姫！大丈夫ですか！」

依姫「お姉様！私は大丈夫です」

「軍が来たのはいいがおそらくそれでも奴には敵わないと思う
だが、私たちがやらなければ誰がやるのだ

例えここで朽ち果てても、この国を守らなければならない

私たちはすぐさま、攻撃を再開することにした

豊姫「行くわよ！ 依姫！」

依姫「はいお姉様！ 必ず奴を浄く

ドッゴーン！

豊姫「なっなに!?!」

依姫「まさか新手か!?!」

突如私たちの前に何かが落ちて来た

一瞬奴の仲間かと思った

だが、今は煙により姿はあまり見えないが、そのものからは穢れを感じられない
一体何が？

『鋼のムーンサルト！ ラビットタンク！ イエーイ！』

.....

主サイド

いったーい（涙）

あの船からの高さだと、生身だったら間違はなくお陀仏になっていただろうなあ
こうやって生きていられるのは、ライダースーツによる肉体強化だろうなあ
やつぱりちよつと痛いけど
でもそんなことよりも

よくも 僕 の 大好きな 都市 を こんな に して くれ
れた な あ ・ ・ ・ （ωω）

妖怪「てめえ、何者だ？」

正義（怒）「お前に名乗る気は無い」

僕は怒りの感情を出しながら、ドリルクラッシュャーで斬りつけた

ダメージは・・・

妖怪「グアアア!？」

よしちゃんとダメージが入ってる

妖怪「この俺を傷をつける程の力を持っているとは、お前美味そうだな。お前から先に食ってやる！」

どうやら今の攻撃で怒ってしまったみたい
でもそれは僕も同じ

正義（怒）「上等だあ！」

.....

依姫サイド

豊姫「親方！空からお師匠様擬きが！」

依姫「お姉様！何おしやっているのですか！」

いきなり空から落ちて来たもの

煙が腫れてそこにいたのは、お師匠様の服装みたいに体が赤と青の鎧を全体に身につけており腰には二本の何かを差し込んでいる道具をつけており、顔は仮面のように素顔が見えないようになっていた

身長は私たちと同じくらいの人物であった

しばらく立っていたら、腰にしていた道具からチューブが出て来たと思ったら、剣になった

そしてその剣を、なんと奴に斬りつけた

しかも、その攻撃でかなりのダメージが入ってるようだ

奴も狙いを私からその人物へと変更していた

豊姫「私たちは、どうすれば？」

依姫「わかりませんが、あの赤と青の者はこちらに敵対はありません。それでしたら・・・」

私はすぐに兵士たちに向けてこう言った

依姫「全兵に次ぐ！あの赤と青の者には攻撃をせず、侵入した妖怪に攻撃するのだ！」

兵士達「了解！」

私たちは、少しでも妖怪と戦っているあの者の支援するために遠距離攻撃を行う事にした

少しでも奴を倒すために

.....

主サイド

あつ！依姫お姉様達が援護してきている

これなら少しはこの妖怪にダメージを与えられるかなあ

しかし、この妖怪、よく見たら確か本で見た上級妖怪のサイクロプスのはず
力だったらとても強いと言われている

だったら、目には目を、歯には歯を、力には力を！

正義「僕もパワーアップするぞ！」

僕はすぐに別のフルボトル、茶色と水色のフルボトルを取り出し、降り始めた

十分に振り終えたら、すぐに差ししているボトルを取り出し、振っていたボトルを差し
込んだ

『ゴリラー・ダイヤモンド！ ベストマッチー！』

僕が新しく差し込んだのは、『ゴリラフルボトル』と『ダイヤモンドフルボトル』で、
すぐにレバーを回し始めた

ドライバーからチューブが出ると今度は前に茶色と後ろに水色の鎧が生成された

『Are you ready?』

正義「ビルドアップ！」

『輝きのデストロイヤー！ ゴリラモンド！ イエーイ！』

僕はラビットタンクフォームから新たなベストマッチフォーム『ゴリラモンド』へと
ビルドアップした

この姿の特徴は何と言っても・・・

正義「はあっ!!」

ドゴオン!!

妖怪「うぐお!？」

そう、力がとても強い事

これは怪力の敵に特化したものである

そしてもう一つの特徴は・・・

妖怪「やってくれたなあ・・・」

と、妖怪が地面のコンクリートを馬鹿力で持ち上げてきた

ここまでくれば、もう分かかってきたけど・・・

妖怪「うりやああああ!!」

その掛け声と共に持ち上げたコンクリートを僕に向けて投げてきた

うん、これは普通の人なら即死するね

普通の人なら

正義「ほいつ」チヨンッ

僕は水色の手で投げてきたコンクリートを触った

すると、あら不思議♪

あの汚いコンクリートが綺麗な沢山のダイヤに変わってしまいました

妖怪「なっ!?なんだと!」

そう、これこそゴリラモンドのもう一つの特長、物質をダイヤに変えることができるのだ

やったね♪あまり痛くも無いし、これを売れば一生遊んで暮らせる

まさに一石二鳥

・
・
・

ふう・・・さすがに戦闘中に巫山戯るのはやめておこうつと

正義「オラオラツ!!」

ドコツ!バキツ!

すぐさま茶色のナツクル、『サドンデストロイヤー』を連続で、殴りにかかった

確かこれは低確率で即死させるほどの威力もあるけど、やっぱり上級妖怪はそれでも

健全(ボロボロだけど)だなあ

さて、そろそろ撃破浄化しないと

正義「勝利の法則は決まった!」

すぐさまサドンデストロイヤーの手をレバーに持っていき、素早くレバーを回した
すると僕の周りに先ほどのダイヤが、妖怪を拘束し始めた

妖怪「!?なんだこれは!?うツ動けない!」

の様だなあ

てか、普通ならさっきの必殺技で倒されるのに、こいつは化け物かなあ（そもそも妖怪だった）

妖怪「この俺をここまで痛めつけることができるとは……やっぱお前美味そうだなあ」
さすがの僕でも困ったなあ

これほどの防御力なら他のベストマッチをしても恐らく耐えられるだろう

完全に倒すには、やっぱり他のベストマッチ以上の力を持つドラゴンボトルとロックボトルの力が必要だけど……

僕ではこの二つは扱えない

どうすれば……

？「うおおおおお!!」

その時僕と、この妖怪以外の声がしてきた

それもこの声、僕は知っている

そう思い、声の発生源の方を見てみると……

流月「妖怪め！覚悟しろ！」

さっき船にいたはずの流月君が剣を持ち、妖怪へと向けて走っていた

恐らく、船はようやく着陸できたみたいだ

妖怪「なんだこいつは？不味そうだなあ」

妖怪がそういつた瞬間、今度は流月君に棍棒を振り下ろそうとした正義「 (!!まづい!) 」

続く

第六話 青き龍の戦士

流月君が僕の必殺技を受けても倒れない妖怪に向けて走っている

それに対して妖怪は目標を変えて、流月君に棍棒を振り落そうとしている
まずい！このままでは流月君は間違いなく粉々になってしまう

僕はすぐに流月君に向けて走り出した

妖怪「ゴミは大人しく潰れるが良い」

流月「はっ！しまった！」

流月君は目の前の妖怪に集中していたので、その妖怪の攻撃には気づかずに行った
そして棍棒は流月君に目掛けて・・・

正義「危ない！」バツ！

流月「グハア！」

振り下ろされることはなく、寸前に僕が流月君を救った

多少ダメージを受けているけど、何とか彼が無事でよかった

依姫「流月!? 兵士達よ！彼を救うのだ！」

依姫お姉様の声があった瞬間に兵士達は僕たちの前に来て、発砲態勢をとった

僕はすぐに、流月君に声を掛けた

正義「流月君！なんて無茶なことを！」

流月「その声！もしかして正義なのか!？」

正義「今はそんな事はいいよ！それよりどうしてこんな事を！」

僕は彼がこんな無謀な事をやった理由を聞いた

彼から出た答えは

流月「決まっているだろ！妖怪を倒すためだ！」

正義「何言ってるの！あいつは上級妖怪！まだ君では倒せないよ！」

彼のあまりにも愚かな考えに僕はすぐに否定をした

それでも彼はその考えを変えずに

流月「そうだとしても！俺は絶対に逃げない！」

そして再び立ち上がる

その姿を見て僕はある人物の姿と重なっていた

考えが悪く、⑨な性格でも、真っ直ぐで正義感が強い熱心なあの男の姿が

万丈龍我

流月「たとえば俺の手に負えなくても！この街を！皆んなを！絶対に守り抜いてやるん

だ!!」

正義「流月君……」

とその時

ピカッ！

正義&流月「「え!?!」」

ドラゴンとロックボトルが先ほどとは比べ物にならないほどの光を放ち始めた

その光は混ざり合い、そこから蒼き龍が現れた

依姫達「「!?!」」

流月「なっ?!?これは一体!?!」

蒼き龍『流月よ。お前はこの街の人間を救いたいのか?』

流月「あつあああ!俺は誰一人も死なせずに皆んな守って見せるぜ!」

その言葉を聞いた龍は暫く黙り込んだが、すぐに声を発した

蒼き龍『いいだろう、その覚悟に免じて新たな力を与えよう!』

するとその龍は流月君の方へと向かっていきとそのまま彼の中に入ってしまった

龍が入った瞬間、僕の発明品『クローズドラゴン』が予備に開発したビルドドライバーを持つてここに現れた

クローズドラゴンはすぐに僕からドラゴンとロックフルボトルをひったくった

正義「ちよっ!それどうするの!」

クローズドラゴンはそのまま流月君へと向かうと、持っていたビルドドライバーと二

つのボトルを彼に渡した

正義「(まさか!流月君がああのボトルを!)」

流月「え?これってさっきの・・・」

もしかしたらこの二つのボトルは、正義感があるものしか扱えないのかもしれないなら僕は、その可能性に賭けるしかない!

正義「流月君!それを腰につけて!」

流月「それ?ってこれか?」カチャ

ビルドドライバーが正常に機能している

それと同時にクローズドラゴンが彼の目の前で首と尾を畳んで彼の手に着陸した

正義「青いボトルを振ってそれに差し込んで!」

流月「おっおう・・・」

シャカシャカシャカシャカ

ガチャ

『Wake up!』

ガチャ

『クローズドラゴン!』

間違いない!

彼なら変身できる

あの青い戦士に！

流月「え？ なっ何この音楽？」

正義「最後にレバーを回して！」

流月「レバー？ あっこれのことか？」

そう言い、彼はレバーを回す

そして現れたのは、一本のチューブで前後に紺色の鎧と左にドラゴンを模した新たな鎧が現れた

『Are you ready?』

流月「え？え？えっ!?何だ!？」

そして前後の鎧は彼の元へと近づき装着された

それと同時に左にあつた鎧も装着された

流月「うわっ!?!痛い!?!つてあれ痛くねえ？」

『Wake up burning! Get CROSS | Z DRAGON! Y
eah!』

ついにあのボトルを彼が使いこなせた

僕のビルドとは異なり、両方がドラゴン状態のビルドで、その上に金色のファイター

パターンが刻まれた装甲「ドラゴライブレイザー」に「バーンアップクレスト」さらに頭部に「フレイムエヴォリユーター」が追加された新たなビルド

・・・いやその姿が新たなライダー、『仮面ライダークロース』だった

流月「うわっ!? なんじゃこりゃ!？」

流月君は変わってしまった自分の体に驚いているみたいだ

僕はすぐにその体の説明をした

依姫「これは!？」

正義「クロース! 君の名前は仮面ライダークロースだ!」

流月「くっクロース?」

正義「そう! その姿の名前だよ! その姿ならあいつを倒せるかもしれない! さあ行く!」

流月「なんだかよくわからないが、いいぜ!」

その言葉をした後に僕は新しい戦士クロースと共に妖怪に向けて走り出した

依姫「流月! やめなさい!」

豊姫「あなたではあいつは倒せないわよ!」

依姫お姉様達の声が聞こえるけど流月君はそれを無視して妖怪に向けてパンチを繰り出した

流月「はあっ!!」ドゴツ!

妖怪「ぐっ!?!」

クローズの力はビルドのどのベストマッチフォームよりも強いいため、パンチだけでも相当の威力である

さすがにこの攻撃にはかなりのダメージが入ったみたい

妖怪「ぐっ!不味そうと思っていたが、意外と美味そうじゃねえか」

流月「へっ! テメエみたいな奴に喰われるのは御免だ!」

正義「行くよ! 流月君!」

僕はすぐに基本形態ラビットタンクフォームになるために、二つのボトルを差し込んだ

『ラビット! タンク! ベストマッチ!』

『Are you ready?』

正義「ビルドアップ!」

『鋼のムーンサルト! ラビットタンク! イエーイ!』

流月「おお・・・すげえ」

正義「よし! 流月君! そろそろ決めるぞ!」

流月「ああ、だがどうやればいいんだ?」

正義「レバーをもう一回回すんだ」

流月「わかった！」

僕と彼はすぐさまレバーを回して必殺技を発動させた

『Ready Go!』

その音声と共に僕は地中に潜り隆起した地面から跳躍した

目の前にはx軸で拘束した妖怪とその妖怪へと続く放射線のエネルギーが現れた

僕はその放射線の上を滑るように加速し、ライダーキックを放った

流月君は後ろに先ほどの蒼い龍が現れた

その龍が蒼炎を放った瞬間、その炎に乗って同じく蒼炎を纏った右足でボレーキック

を放った

『ボルテックフィニッシュ！』

『ドラゴニックフィニッシュ！』

妖怪は必殺技を受けてもなお生きていた

だが、すでに致命傷を受けているため倒れるのは時間の問題と思う

二つの必殺技を受けた妖怪は炎を纏いながらこちらを見ていた

妖怪「まさか・・・この俺が・・・ここで・・・終わる・・・とは・・・」

その言葉を最後に妖怪は爆発した

ついに都市を襲った妖怪は撃破浄化された

流月「やった・・・やったぞおおお！」

彼は上級妖怪を倒せたからか、とてつもない喜びをしていた

まあ、そうだろうなあ

軍でも倒せない程の力を持つ妖怪を倒せたことに喜ばない人はいないと思う

そう思った後僕はすぐに変身解除をした

正義「ふう・・・」

流月「！やっぱり正義だったんだ！」

正義「うん！そうだよ！」

やっぱ、あの時にわかっていたんだ

まあそうだよね

普通漫画やアニメなどでは声だけではバレないけど、実際はバレるからねえ

依姫「なっ!?!正義くんがお師匠様擬き!?!」

豊姫「へっ?全然知らなかったわ」

あれ?いつも側にくれていたはずのお姉様方が知らなかったなんて

普通わかるはずなんだけど

ちよっと傷ついたかも(´・ω・｀)

僕は流月君と共に星が輝く夜空を眺めていた

僕が前世にいた頃は、街の光で星がよく見えなかったけど、ここは都市でも星が見えやすいところだった

僕たちは今日起こったことを星を見ながら喋っていた

流月「いやあ、今日は大変だったなあ」

正義「そうだね」

流月「まさか、この俺が上級妖怪を倒せたとは考えられないなあ♪」

正義「その割にはとても上機嫌だよね（汗）」

なんて会話をしていた僕たち

実はこの後、この出来事は都市の貴族や上層部にも伝わり、都市を救った英雄達となり、軍からも「五十嵐様！ぜひ私達の軍に入ってください！」と言われてしまい、軍の中でも優秀な人物だけが入れる特殊隊の隊長になってしまった

これを聞いた永琳お姉様は溜息していたけど、心の中ではとても嬉しそうな感じをしていて、依姫お姉様方はとても喜んでいた

ちなみに流月君は、今回の件によって、僕と同じく特殊隊のNo. 2に昇格した多分こんなに上機嫌なのは、これだと思っ

流月「あ、そうだ。これお前に返すよ」

そう言つて取り出したのは、ビルドドライバーとドラゴン、ロックフルボトルだった
どうやらこれを僕に返そうとしているみたい

でも、僕は・・・

正義「・・・いいよ、それ流月君にあげるよ」

流月「え!?!いいの!?!」

正義「いいよ、どの道この二つのボトルは、僕には扱えないし、それにこの二つのボトルは多分君を選んだと思う。だからそれあげるよ」

流月「ありがとよ」

正義「でもこれだけは理解してほしい。ライダーを兵器として使用しないでほしい。これは人を守るために作られたものなんだ。だから人の命を奪うために使うのはやめてほしい!」

流月「わかったぜ。気をつけて扱うぜ」

この会話を最後に再び星を眺めた

これから起こることを考えずに

???
サイド

「陛下、此度のことはどう致しましょうか？」

陛下「ふむ、まさかこの都市に妖怪が侵入してくるとはなあ」

私は此度に起こった全てのことを陛下に話して今後のことを考えていた

陛下「いずれ、此度の起きたことは妖怪に知れ渡るであろう。そうなればこの都市は穢れに満ちてしまうだろう。お前が考えていた『月移住計画』を実行しなければなら
いなあ」

かつて私は、この都市が穢れに満ちる前に、穢れが一片もない月へと移住する為の『月
移住計画』を考えていた

今回の件にて、陛下はこの計画を実行することにしたようだ

しかし、そのことよりも厄介なのは・・・

「陛下、その件の了承は誠に嬉しいのですが、その前に例の子供の件なのですが」

陛下「ああ、9年前に言っていた八意が預かっているあの子供の事か」

「はい、あの子供をどう思いますか？」

陛下「彼奴は儂の持つ権力を明け渡してはしまいかもしれない程の権利を持ってお

る。オマケに月夜見様のお気に入りでもある。彼奴はかなり危険だ。何としても始末せねばならん」

？「しかも、今回の妖怪を倒したのはその子供と月村流月という者らしいのです」

陛下「うむ、流月はまだ良いとして、その子供までもが今回の件にて活躍したとなれば、人民達はより彼奴を信頼してしまうだろう」

？「はい、一刻も早く、あの子供を始末致します」

陛下「うむ、頼むぞ『安久利源八郎』」

続く

第七話 清めの鬼

あの事件から35年も経った

僕は相変わらず子供のままであつた

オマケに精神もあんまり変わっていないみたい

それでも都市の人々は僕か流月くんを見ると

モブ1「おい！五十嵐様だぞ！」

モブ2「今日も可愛らしいです♪」

モブ3「まさに、この国の希望ですなあ」

モブ4「今すぐにでも襲いたい（ハアハア）」

モブ5「私・・・五十嵐様と結婚します！」

なんて声を聞くようになってしまった

てか、最後の二つ絶対危ない人だよ

しかも何故かデジャブな感じ

まあ、その辺は置いて、あの事件の後、新たなライダーシステムを開発してい

た

オーズドライバーに、ブレイドバックル、カプトゼクター、ファイズギア、ディケイドドライバー、ウィザードドライバーにソニックウェーブなど、全てのライダーシステムを開発した

大体は、危険妖怪討伐の指令にて使用した

どれも正常に機能しているため、実験は成功していた

ただ、まだ一つだけ試していないライダーシステムがあった

それがこの鬼の顔が彫られた道具だけだった

隊員「五十嵐隊長、妖怪討伐の命令がきました」

正義「え？わかった。すぐに行くよ」

隊員「はい、お待ちしております」

と、ここで新たな妖怪討伐の命令が来たみたい

よし！そうとなれば、最後のライダーシステムの実験をしておこう

依姫「正義君、討伐に行くのか？」

とそこへ、依姫お姉様と豊姫お姉様が現れた

お姉様方もこの部隊の偉い方に所属しているため、よくこうやって会うことが多い

正義「依姫お姉様、そうですね」

依姫「なあ・・・もうそのお姉様っていうのはやめてもらえないかなあ（照）」

豊姫「そうよ♪昔みたいに『お姉ちゃん』って呼んでくれたら嬉しいんだけどね」
依姫「ちよっ！それはそれで恥ずかしいですよお姉様！」

ああ、またお姉様方の喧嘩が始まってしまった

なんでこんなに喧嘩するんだらう

あ、でも喧嘩するほど仲がいいっていう言葉があるから、こう見えてとても仲がいい
と思うなあ

つとと、早く討伐に行かないと

正義「じゃあ、僕は討伐に入って来ます」

依姫「あ！悪いなあ。頑張るんだぞ」

豊姫「正義君、気をつけてね♪」

正義「はい！いつてきます！」

—————

隊員達としばらく歩いて16分後

目的地である森にたどり着いた

この森の奥で討伐対象がいるとの情報が入っていた

ここから先は警戒して行かないと、すぐにやられてしまうかもしれない

正義「皆んな、こっからは警戒して進んでね」

隊員達「「了解！」」

その言葉をして僕達は、森の中へと入っていった

さて、早くその対象者^{実験対象}に会ってみたいなあ

隊員1「そういうえば、隊長。いつもお持ちのベルトは？」

正義「え？置いて来たけど？」

隊員2「え!?大丈夫なのですか!?!」

正義「大丈夫だよ。別のやつがあるからね♪」

そう、今回はこの鬼の顔が彫られた道具以外の道具はみんな置いて来た

本当ならこの道具は、早く使おうと思っていた

しかし、この道具で変身するライダーは、機械ではなくある術式の力も使って変身す

る仕組みになっていた

前世では、テレビでは陰陽道の一つであった音撃道という特殊な陰陽道だった

その陰陽道の構造がよくわからなくて、開発には一苦勞させられたなあ

おまけに清めの音を出すのに必要な『鬼石』に『霊木』は自分でも作れないため探し

たり、変身するのたびに衣服が燃えるという設定を改良するのも大変だった

一応完成したけど、まだ正常かもわからない

さつき全部置いて来たって言ったけど、一応念のためにビルドドライバーは所持している

でもやつぱり、これを使ってみたいから成功してほしいなあ

ガサガサツ

むっ？

近くの茂みから音が聞こえた

動物かあ？

いやこの気配、穢れの気配を感じるなあ

それもかなりの穢れだ

恐らく、討伐対象になっている妖怪だと思う

まずは相手の姿を拝んでみよう

グルルルルツ

目の前に現れたのは一匹の狼

いや、今狼って言ったけど、普通の狼ではなくて、かつてビルドで倒した熊の妖怪よりも少し大きい狼であった

てか、これ絶対も●●け姫に出て来たも●●だよ、あの犬神の

まさか、ここで●●口擬きが出てくるなんて思ってもいなかった

って違う！そうじゃなくて、今こそ実践する時だ

隊員1「隊長！どうするのですか!？」

正義「決まっているよ！こいつを倒す！」

隊員2「しかし隊長は、戦えないんですよ！」

正義「いつものやつはないけど、これがある！」

そう言つて僕はさっきの鬼の顔が彫られた道具を取り出した

その道具の角あたりを近くにあつた木に軽く叩いた

キーン…

叩くと奇妙な金属音が聞こえてきた

すると角から微量ながら空気が振動していた

僕はすぐさま振動しているうちにそれを額に近づけた

すると額に道具と同じ鬼の顔が浮かび上がった

そして鬼の顔が浮かび上がった瞬間僕の体は赤くなつていき、紫色の炎に包まれた

隊員達「隊長!!」

突然のことに隊員達は驚いているみたい

そうしている間によつて僕の体は少しずつ変化している

さあ、そろそろ完了の頃だ

正義「ハアー…タアツ!!」

掛け声とともに自分の右手を横に振った

そしてそこからいつもとは違う姿の自分が現れた

紫色の体をし、腰あたりには前には不思議な模様が描かれた物、後ろには太鼓のバチの様な武器が付けられていた

身長も変身前の自分とは違い、高くなっている

そして頭には先ほどの顔に、二本の銀のツノが付いていた

間違いない、ついに変身することができた

自らの身を属性の力で最強の妖怪『鬼』に変えて、魔化魁化け物を浄化する戦士、『仮面ライダ―響鬼』に変身することができた

隊員1「!?鬼!?!」

隊員3「まさか!?!隊長鬼だったんですか!?!」

隊員達を見ると鬼に変身した自分を見て怯えているみたい

そりやそうだよね、都市でも鬼は妖怪の中で最強の存在と言われているから

いきなり自分が、鬼に変身したら怯えちゃうよ

じゃあ少し説明しておこうかなあ

正義「いや、違うよ。この姿はさっきの炎で自分の体の構造を少し妖怪に近い存在へ

と変えたんだ」

隊員2 「妖怪に近い存在・・・ですか？」

隊員4 「確かに隊長からは妖怪が持つ穢れを感じられませんが」

隊員3 「じゃあ、それも『仮面ライダー』なのですか？」

正義 「まあ、そんなとこだよ、」

まあ、当初は・・・ってそんな事は後でいいや

とにかく目の前の妖怪を早く倒さないと

ガアアアアアア！

妖怪もさすがに痺れを切らしたみたい

まあ、狼の妖怪って基本的には気が短いって本で書いてあったからねえ

すぐさま即死させる程の爪で僕を切りかかってきた

でも、あんまり調子に乗らないでほしいなあ

このライダーは傑作の一つでもあるのだから

正義 「はっ！」 シュツ！

妖怪の爪が当たる前に僕はジャンプをして避けた

うわあ、やっぱり響鬼の身体能力はとてつもないなあ

ちよつとジャンプしただけで木の枝までも超えてしまった

劇中でも、土蜘蛛の童子と姫との戦いで凄まじい跳躍力だったしなあ
シヤツ!

正義「うわっ!?!」

さすがは都市で戦ったと同じくらいの上級妖怪

一切の隙も見過ごさずに、攻撃を仕掛けてくるとは

やっぱり強いや

僕はすぐに後ろに装備されている武器、『音撃棒：烈火』を手にした

苦労して作った道具の一つ、その性能が再現されていることを祈ってるよ

正義「はあ~~~~っ」

僕は音撃棒を手にして、棒の先端についている鬼石に『気』を送った

すると次第に鬼石が光り始め、火が生み出された

僕はそれを確認した瞬間、音撃棒を妖怪に向けて振った

正義「はあっ!!」ドドンッ!

すると先端から火の玉が出てきて、火の玉は妖怪へ向っていった

グガツ!! ヒョイ!

やっぱりそう簡単にはいかないよねえ

僕が放った火の玉を妖怪は簡単に避けられてしまった

正義「皆んな！行くよ！」

隊員達「了解！」

僕はすぐさま隊員達に戦闘開始の合図を出した

すぐに隊員達は、妖怪との距離を取り、機関銃で遠距離攻撃をし始めた

だが、妖怪は機関銃の弾を軽々と躲けて行く

こうなったら、これと連携していかない

そう思って僕は腰についている一枚の銀のディスクを取り出した

ディスクにさっきの道具『変身音叉音角』を取り出し、角をディスクに軽く叩いた

するとディスクが銀から赤に変わり、ディスクが変形して鷹の様な姿をしたものに変

わった

これは響鬼に登場した式神の一種にして、サポートモンスターである『ディスクアニ

マル』にしてその中の一体、『茜鷹』である

本来は録音に録画、劇中に登場した魔化魍の探索に使われているけど一応攻撃も可能

な式神であつた

グガッ!?

突然の茜鷹の攻撃に思わず驚いていたけどすぐに横に避けた

でも、その避けが僕の狙いなんだよね

正義「はっ！」ドドンツ!!

グガアアア!!

僕は避けた瞬間に再び火の玉を飛ばした

避ける場所を狙ったので、ようやく妖怪に当たった

あ!あれも試して見たいなあ

そう思い僕は少し妖怪に近づいた

すると僕の口当たりが変形していき、まるで鬼の口の様なものになった

僕はすぐに正義の怒りをエネルギーに変えて、口に蓄えた

妖怪は、すぐさま僕に再び爪攻撃を仕掛けてきた

僕はすぐさま・・・

正義「はっ！」ボーツ!!

ギャアアアアアアアア!!??

口から紫色の火炎を吐いた

その炎を受けた妖怪は苦しんでいる

この炎は劇中では童子や姫を一撃で粉碎するけど僕はあらゆる穢れを焼き尽くす力

を持った炎に改良した

そのためこの炎攻撃は妖怪にとっては致命的だと思う

さて結果は・・・

ギヤアアアアア・・・

炎に包まれた妖怪はその声を最後に絶命していった

凄い♪妖怪退治はこのライダーがうってつけだね♪

上級妖怪もこれで怖くないや

隊員1「隊長！やりましたね」

隊員3「凄いです隊長！」

正義「まあ、鍛えてますから」シユツ

さてとこの姿のままだと都市で何かと誤解されてしまうから、変身解除しないと

さてここまでは全て順調だった

「ここまでは全て順調だった

隊員達「「!?!」」

あれ？なんかみんな驚いているなあ

しかも女性の隊員はまるで食べたそうな目で僕を見ている

え？僕の体に何かついてるの？

隊員1「たっ隊長・・・その姿はさすがに・・・(汗)」

正義「え？」

そう言われて僕は自分の体を見た

見た所なんの変化はないよ

僕の姿は人の姿に戻ってるし、自分の肌がよく見えてどこもおかしなところ・・・

ん!?肌!?

改めて見てみると、先ほど僕がきいていた部隊の服は体から消えて無くなり、見えていたのは足は裸足で、お腹は丸出しであった(ビルドドライバーはちゃんとあります)

そして僕は、お腹の下を見てみると・・・

一本の小さいバナナが見えていた

正義「!?!?!」

まさかぬ衣服が燃えない様にした筈が、そこだけは正常ではなかったなんて

運命って本当に残酷だなあ・・・

ちなみにこの出来事は隊員の一人がカメラを納めていたため、僕のいやらしい写真が高価格で売られてしまった（ほとんど女性が買っていた）

第八話 普通の日常

あの討伐（と露出写真販売）から4年経った

え？前にもこんなことがあったって？

気にするなっ！

まあ、それよりも僕はあの討伐後に落ち込んで4日の間寝込んでしまった

だって、僕の生まれた姿を隊員達に見せつけてしまつて、都市の女性達からはまるで僕の大切なものを狙っているかの様な眼差しで見っていた、それも依姫お姉様方に永琳お姉様までも

そんな日々が続いたため、僕は自室から出ることはなく、露出してしまった自分に恨みを持つて、ベットに寝込んでしまった

さすがにみんな心配して僕のところへ来たけど、その時の僕は凄ひねくれてしまつていたためすぐに皆んなを部屋から追い出してしまった

まあそれほど、僕は落ち込んでいたんだと思う

それでも、依姫お姉様方は僕を励ましてくれたからなんとか復活できた

その後は衣服が燃えない様にする為に僕は変身するたびに改良していった

その度に衣服は犠牲燃焼してしまった

まあ、成功には犠牲はつきものだし・・・ね

なんかかんやあつてついに衣服が燃えない設定に改良することができた

これ以上露出してしまったら、なんか僕の何かが奪われてしまいそうだからねえ

—————

軍の方から暫く休みをもらった為も何もなく、ただ普通に過ごすことになった

まあ、この間にライダーの強化アイテムの製作をしてしまったけどね

ああ・・・なんか退屈だなあ

・・・

あ！そうだ！依姫お姉様方の道場に久しぶりに行こう

軍に入ってから、道場に行っていないから、久しぶりに行って依姫お姉様と手合わせ
しておこう

よし早速、全速前進DA！

く4分後く

もう道場についてしまった

最初の頃は20分はかかるんだけどなあ

あれ? そういえば最近、生身でも身体能力が上がっている様な感じがするなあ

あ、確か響鬼になる為には特殊な訓練とかなりのトレーニングが必要だったから、その時にやったトレーニングが生身でも力がついて来たんだ

まあどうでもいいや

さて、早く手合わせしようっ♪

正義「お姉様方、おはようございます♪」ガラッ

依姫「え!? あっ正義君、おはよう!」ピクッ!

豊姫「あらおはよう正義君♪」

あれ? お姉様方が見ているその小さな紙、MA☆SA☆KA
にゅっ

むむっ! やっぱり

あの時の僕のいやらしい写真だ!

正義「ちよっと! なんでそれを見ているのですか!」

依姫「え? いや・・・その・・・」

豊姫「ええ、いいじゃないの。正義君の姿がとても可愛らしくて、美味しそうだし(ジュルリ)」

正義「取り敢えず！この写真は没収します！」

ヒヨイツ

依姫「ああ……(涙)」

豊姫「残念ねえ……」

もう、朝からこれって、いきなり疲れて来ましたよ

もう早く手合わせしよう

—————

ふう……久しぶりの手合わせやっぱいいなあ

依姫お姉様と戦うことができたし、自分の腕をより上げることができるところからね

流月「お！正義、お前も道場に来ていたのか？」

正義「あ、流月君。うん、久しぶりに依姫お姉様と手合わせをしたくなってね」

流月「なるほど、あつそういえばお前『偽りの鬼』になつたつて？」

正義「え？いつ『偽りの鬼』つて？」

流月「え？だつてお前、妖怪を倒す為に、『妖怪に近い存在になって、その姿が鬼だつた』って軍の間ではそう言われているぞ」

正義「まじですか(汗)」

流月「まあ、あの姿では穢れは感じられなかったみたいだし、それにその力で妖怪を浄化したって言われているし、軍でも『穢れを浄化する妖怪』なんて言われるまでになつてるし、別に問題はないと思うぜ」

正義「だといいですけど・・・」

なんか僕のことを誤解しているみたいだなあ

僕は妖怪ではなく、純粋な人間なんだけどなあ

そりゃあ、響鬼は魔化魍を倒す為に、魔と同じ様な存在になるからねえ

さて少し名残惜しいけど、そろそろ新しい開発のために帰ろうつと

正義「じゃあ、そろそろ行くね？」

流月「おう、またな」

—————

さて、さつき僕は、新しい開発って言ったけど、その開発はもちろんライダーの開発であつた

その理由は軍から、僕と同じライダーシステムを譲って欲しいと言われてしまったからだ

さすがにそれだけは断つただけど、ぜひつ！と言われて、結果強制的に許可をして

しまった

さすがにライダーを軍事利用するのは駄目！

しかしもうここまで来てしまつては、何とかライダー並みの妖怪だけ倒せるぐらいの力しかないものを考えなくては

？「おや、五十嵐殿。こんなところでお会いするとは・・・」

正義「あ、この声は！」

後ろから声が聞こえて、僕は慌てて振り返つた

そこにいたのは、長い灰色に近い水色の髪をして、頭には独特の烏帽子の様なものを被つた人に、全身が赤い鎧で中央には鬼の様な模様が付けている二人の人物でした

烏帽子をかぶっている人は、月夜見様の直系後嗣の中で最も地位が高いお方、『都久（ツク）親王』様と軍隊の最高指揮者で僕と依姫お姉様の上司にあたる『細愛（ササラエ）親王』様であつた

永琳お姉様とは社会体制では敵対しているけど、僕にとっては憧れの存在だった

正義「都久親王様！細愛親王様！」

僕はすぐさま二人の前で膝をつけてお辞儀をした

都久親王「こちら、こんなところで跪くではありません」

正義「何をおっしゃっているのですか！貴方方は僕にとって尊敬する方々なのですよ

！」
都久親王「はあ、全く五十嵐殿は本当に面白いですね。ここまで私のことを尊敬しているとは」

正義「ありがたき言葉です！」

都久親王「それにしても、五十嵐殿の製作した兵器は誠に素晴らしいですね。八意殿が製作できないものまでも製作できる五十嵐殿の知恵は私が目指す平和には本当に必要ですね」

正義「ありがとうございます！」

細愛親王「はははっ！五十嵐殿はこの都市の英雄である筈なのに、我々に対してここまで尊敬するとは。英雄がすることではありませんな！」

正義「いえ！例え英雄であってもお二人には敵いません！あ、細愛親王様！また劍のお相手させていただいてもよろしいでしょうか？」

細愛親王「いいだろう！その時を楽しみにしておるぞ！」

正義「はい！では、これにて失礼致します！」

僕は立ち上がり、二人から離れていった

いやあ、まさかあのお二人に会えたなんて、なんて幸運なんだろう♪

都久親王「細愛殿、五十嵐殿を見てどう思いますか？」

細愛親王「は、彼は私にとってまさに理想の部下です。あそこまで私を尊敬するのは彼しかおりません」

都久親王「そうですか、私もあそこまで私を信頼されているのは彼だけです」

細愛親王「ええ、ただ問題なのは、八意殿が彼を育てていることです。いつしか八意殿は我々を脅かす為に五十嵐殿を使うかもしれない」

都久親王「ええ、そうなってしまう前に・・・」

何としても彼を此方に引き込まなければなりません」

続く

第九話 桃玉と姫と月移住

今僕は、ゲームをしていた

前世にやっていたゲームを思い浮かべながら、その全てを再現することができた
テレビはなぜかこの時代からあったから、僕が作らずに済んだ

ていうか、何故この時代に日●レやテ●朝、フ●テレがあつたんだろう？

しかも番組も全て、前世と同じと同じ、仮面ライダーも日曜日にやっていたし

しかもこの19年間見て見たけど、まさかのオダギリジョーさんに細川茂樹さん、佐藤健さんなどのパパと一緒に見た仮面ライダーの主人公役者の本人たちもいた！

え？もしかして前世の彼らは本当に人間じゃないのかなあ

もうツツコミがつかないよお（汗）

まあ、それは置いてしばらくは開発だの、討伐だので忙しかつたけどこれで僕の
プライベート時間が楽しめるね♪

あ、そうだ

正義「ねえ、一緒にゲームやろうよ！」

僕は壁の向こうにいるあるある人物に声をかけた

その声を聞こえたのか、こっちへと近づいて来た？ 「はいっ！」

その声と共に壁の向こうから現れた人物？

皆んなは多分永琳お姉様を読んだと思う

しかし、それならば僕は永琳お姉様に対してもっと礼儀よく呼ぶつもりだった

それに永琳お姉様は今日、日中は出かけていた

え？ それならばこの家には僕しかいないじゃない？

確かにそうかもしれない

この家には人間は僕しかいない

でもこの家には別のがいる

だからと言ってそれは妖怪でも動物でもない

その声の正体は・・・

？ 「ぼよっ！」

ピンク玉の姿をした英雄だった

—————

2年前に僕は意識で再び零龍さんに語りかけた

正義『零龍さん、聞こえていますか？』

零龍『ああ、聞こえておるぞ。何の用かな？』

正義『はい、蘇生する前に言っていた3つ目の願いのことなのですが・・・』

零龍『ああ、あのことか。それならもう完成しているぞ』

正義『ついに・・・ついにあのキャラに会えるんだ！』

ついにあのキャラの命を作り終えたみたい

ここまで随分と時間が経ったなあ・・・

永琳お姉様に拾われて、依姫お姉様と豊姫お姉様に可愛がられて、流月君と友達になつて、ライダーシステムを製作して、そんな日々があつて楽しかったなあ

でも、今回はそんな出来事の前に楽しみにしていたことがようやく出来る

零龍『では、今から現実にも召喚させよう。取り敢えず会話はこれで終わりとしよう』

正義『はい、ありがとうございます零龍さん』

僕は再び意識を現実の方に戻した

すると僕の目の前で光が集結し始めた

その集結している光は次第に形を形成し、三つ目の願いが目の前に現れた
間違いない、前世でやっていたゲームのキャラクター、『カービー』だ！

正義「わあ！ やつと会えた！」 ばっ！

正義「永琳お姉様！お帰りなさい！」

永琳「ええ、たたいm・・・!?正義！それは一体!？」

正義「ああこの子?カービイって言うんだよ♪」

カービイ「・・・はい♪」

永琳「あ・・・はい♪っじやなくてなんで妖怪が私たちの家にいるの!？」

え?もしかしてカービイを妖怪と思っているのかなあ?

あ、やばい永琳お姉様が弓を取り出してこっちに向けている

早く説明しなきや

永琳「正義!早くそれから離れなさい!それは妖怪よ!」

正義「永琳お姉様、悪いのですがこの子をよく見てください」

永琳「え?」

永琳お姉様は一度理解できないような顔をしていたけど、僕の言われたようにカービイを見ていた

永琳「?おかしいわね?これから穢れが一片も感じないわねえ」

正義「そりやそうですよ。この子は『星の子』だから」

永琳「『星の子』?」

確かに永琳お姉様のいう通り、この子は本来ならば穢れを持った一つの命になってい

た

だから僕は零龍さんに頼んで、普通の生き物ではなく、『星^星の精霊^子』として作り出して欲しいと頼み込んだ

精霊は妖怪と違って穢れを持たないみたい

だから本家とは違い、星の精霊となったカービイには『穢れ』は無いということになる

前にこの都市の貴族の 稀神サグメ様にお会いして良かったあ

もしお会いしていなかったら今もカービイに対して色々と改善していたと思う

まあ、そもそもカービイには『寿命』は無いと思うけど

永琳「・・・ちよつと、見苦しいところを見せてしまったわね正義」

正義「いいよ。永琳お姉様も人じゃないのがいたら妖怪と思ひ混乱するのは当たり前だもん」

そりやあそうだよ、人間じゃないのがいたら見た目だけでも勘違いされるよ

まあ、カービイが妖怪じゃないことがわかって良かった

せっかく生み出してくれたのに、すぐ撃破なんてせっかく生み出してくれた零龍さんが涙目になってしまう

あ！少し零龍さんの泣き声が聞こえている

へタレなのかなあ？

永琳「しかし、まさか正義が精霊までも作ってしまうなんて・・・」

正義「え？まつ・・・まあね」

本当は零龍さんが作っただけど

うわ！零龍さんの泣き声がうるさいよ

やめて！零龍さんの涙が中で溜まってちよつと重いよ

てかなんだか僕まで泣きたくなつちやうよ（汗）

永琳「私なんか正義を泣かせる様な事した？（汗）」

正義「え!? なつ泣いてないよ!？」

え？何で僕が思ったことが見えるの？

あ、これが流月君が言っていた女の勘って言うやつかなあ？

怖い（・・・）

—————

カービィと出会って2年経った今も、カービィとゲームしたり、武術を極めたり、一緒に討伐に行ったりと一緒の時間が沢山取れた

あれからカービィは都市の皆んなからは僕が作った新しい精霊として結構人気に

なっていた

まあ可愛いのが一番の人気の理由なんだけど

コピー能力は健在で、何の問題はない

何故か依姫お姉様方からは物欲しそう目で見ているけど

まあ、カービィはとても抱き心地がいいんだけど・・・

原作よりもこのカービィ結構人見知りなんだよ

—————

？「きいーっ！また負けた！もう一回！」

正義「そろそろやめにしませんか？もう夕方なんですけど・・・」

？「いやよ！私が勝つまで止めるわけにはいかないわ！」

カービィ「ぼよおー」

今僕たちは、ゲームをしていた

僕とカービィ、そして隣にいる赤い衣を身につけている女の子と一緒に、マ●オ●

トのvsモードをやっていた

ちなみにこれも僕が前世の記憶で再現させたもの

正義「あまりしすぎると目が悪くなってしまうですよ」

? 「うるさいわね! 悪いのはこんなのを作った正義のせいよ!」

正義 「何で僕のせいになるんですか?」

? 「だってこんな面白いものを作って、誰もやめられなくなっちゃうじゃない! だから全部正義のせいよ! 笑いなさいよ!」

正義 「滅茶苦茶だ・・・」

もうなんなの、全て僕のせいなの

と言うかそのセリフは明らかにマッドサイエンティストが発したセリフ・・・

今僕とゲームしながら会話しているのは蓬萊山赫映様で、永琳お姉様は赫映様の教育係を務めているみたい

その時の永琳お姉様の呼び名が『思兼』と呼んでいたことには僕はびっくりしてしまつた

『思兼』っていえば前世の小学校での教科書で神様の一人『八意思兼神』というのが乗っていた

教科書からは常世から現れてあらゆる幸福をもたらす神様と書かれていた

まさか僕がずっと神様に育てられていたとは

あ! でも月夜見様も神様で育ててくれたから一緒か・・・

おっと! 話が脱線してしまつたよ

それで僕は永琳お姉様がいない間の遊び相手としてここにいる

初めて赫映様と出会ったのは、僕がまだ二歳だった頃で、その時は僕が何故か世話されてしまったと言うエピソードになってしまった

正直に言つてあれは恥ずかしかつた／＼

赫映「もう、あ！そうだ。正義ちよつとお願ひがあるんだけど」

正義「もうゲームは終わりですよ」

赫映「違うわよ！ええ、正義は4日後の月移住計画についてどう思うの」

正義「月移住計画・・・」

『月移住計画』。この都市に住んでいるものは全員知つている事であつた

最近都市に妖怪が入り込む事が多くなり、今となつてはこの都市は穢れが溜まり始めてしまったみたい

その為今までなかつた、『歳』が現れる様になつたと

その為この都市を捨てて、穢れが一片もない月へ移住しようという計画だつた

僕は永琳お姉様の下にいたからその計画はすぐに僕の下に入つてきた

赫映「私はこの地上にいたいと思つてるの。確かにこの地上には穢れが多いけど、その分もつと素敵なものがあると思うの」

正義「確かに僕たちの知らないものがこの地上にはたくさんあると思います。でもこ

の計画は全員が望んでいる為、誰にも止められません」

赫映「そう・・・やっぱり私達も月へ行くことは止められないのね・・・」
やっぱり月へ行くこととなるとこの地上が名残惜しくなってしまう

この地上にはまだまだ知らない事がたくさんあるのに・・・
僕でもそうなるてしまう

永琳「正義、待たせたわね」

正義「あ！永琳お姉様、お疲れ様です」

永琳「ありがとう。では姫様今日はこれにて失礼いたします」

赫映「ええ、思兼今日はありがとうね」

—————

永琳サイド

今日は4日後に実行される月移住計画についての最終会議が行われた
特に何の問題もなく順調に進んだわ

あとはこの計画がうまく行く事を祈ってるわ

永琳「正義、ひとついいかしら？」

正義「はい何でしょうか？永琳お姉様」

永琳「これからも私たちの元にずっといることはできますか？」

正義「・・・何を仰っているのですか？もちろんですよ！ずっと皆んなの元にいますよ！」

永琳「そう・・・わかったわ」

いつもの様に見上げてそう答えていた

いつもの様な回答だったけどこの時の私は安心してしまった

ずっと私たちの下にくれてくれる・・・

私の元にくれてくれる・・・

だからこの言葉がとても嬉しかった・・・

・・・この子を手放したくない

・・・失いたくない

・・・だって私、この子のことが・・・大好きだいじになっちゃったから

私わたしがずっと愛情を持って育ててきたけれども、今となっては愛情とは違い、この子に對する『愛』が大きくなってしまった

この私が小さい子ども・・・正義に欲ほしてしまふ様になっちゃおうとは

だから、月でもずっと一緒に居たかった

だからその言葉ことばがとても嬉しかった

続く

第十話 プレゼントと告白と妖怪

ついに月移住計画決行まであと明日になった

すでに都市の空港には月へ行くためのロケットに、一隻の船ハルバードがあった

僕が捻くれて居た後に僕は宇宙空間でも飛行可能にする為にハルバードを空中戦艦から宇宙戦艦に改造してあげたんだ

その船に乗る人は軍の人だけで、貴族や住民はロケットで月へ行くことになった

そして今日はその前夜祭的な何かを行うことになっていた

もちろん僕も参加（強制）することになってしまった

やっとライダーシステムの呪縛から解けたのに・・・

—————

2日前

正義「やつとできた〜」ぐったり

赫映様との遊戯した次の日に僕はあるライダーシステムの開発を終えた

それは前に軍の人たちから要求されたものであった

あの後僕は今までのライダーについて考えてみた

まず軍が使用するとすると、主人公や2、3号等のライダーでは上級妖怪さえも倒してしまふので私欲に使ってしまう危険性が高い

だからここは並の妖怪を簡単に倒せそうな『量産型ライダー』を開発することにした
ただ問題はそこからであった

まず僕は『ライオルーパー』を考えてみたけど劇中では人間に試そうとしたら死亡している為これは却下

次に『仮面ライダーメイジ』。これはなかなか良いと思ったけど、これは魔力がないと機能されない量産型であった

軍の人の魔力を調べてみたけど機能させる程のはなかった

その為これも却下

『ライドプレイヤー』は誰でもできるけど、その為には僕がエグゼイドへの変身の為に埋め込んだ『バグスターウイルス』をクロニクルガシャットにも埋め込まなくてはならない

いや、それよりもこれは機能させたらゲーム病にかかてしまう恐ろしいガシャットであり、さらにエグゼイドには必ず表示されているライフゲージが隠されている為、そのままゲームオーバー^死する可能性もある

これも却下

『量産型マツハ』………却下

うーんいいのがないなあ

あとは何が……

……

あ！そうじゃん！

『黒影ドルーパー』があつたじゃない！

あれなら誰でも使用可能だし、変身するのにリスクもない

あと今まで鎧武のキーアイテム『ロックシード』を作ってきたけど、マツボックリロッ

クシードはとても製造しやすいし

おまけに集団で怪人一体倒せる戦力だし

よし！これにしよう！

とはよかつたけど、これを一人で作成するのなあ

量産型を製造できる機械を作っておけばよかつたあ

さて初めないと……

という感じで今ようやく最後のドライパーを製造し終えてクタクタだった

ああ……眠いやあ

時間を見てももう22時過ぎだ

僕のような子供はもう寝る時間だ

でもその前に完成しておきたいものがあるんだつた

寝る前に早く作っておかないと・・・

—————

とまあ、こんな風に3日前は深夜までの製造によつて次の日は昼まで寝てしまつた
おかげで永琳お姉様にお説教されたのは良い思い出になつた

黒影ドルーパー用のドライパーはすでに軍に明け渡して、テストを行つた
防御力、攻撃力共々、通常の兵器よりも良好だつたみたい

軍の方もこの黒影ドルーパーを気に入つたみたいだし、良かった
さて残りのもある人に渡しておこう

—————

正義 「依姫お姉様！ 豊姫お姉様！」

依姫 「正義君！ どうしたのかな？」

豊姫 「あら？ それは一体何なの？」

豊姫お姉様が指差したのは背中中に背負っているリュックだった

その中に渡したいものをしまっている

すぐにリュックを地面に置いて中から二つの箱を取り出し、それぞれを二人に渡した

正義「依姫お姉様はこの長い箱を。豊姫お姉様にはこの小さい箱を渡します」

依姫「随分と長い箱だな正義君」

豊姫「正義君、なんか私だけ小さくない？」

正義「いいから開けて見てください♪」

二人は言われた通りに箱を開け、中身を取り出した

中に入っていたのは、依姫お姉様の方は一本の刀で、豊姫お姉様の方は一つの扇子で

あった

依姫「これは！なかなか斬れ味のいい刀だな」

豊姫「あら♪いい扇子ね。これってもしかして正義君が作ったの？」

正義「うん、まずその刀は依姫お姉様の持つ『神霊の依代となる程度の能力』を体だ

けでなくその刀にも宿すことができる様に作っていて、豊姫お姉様の扇子は煽いだけで

『森さえも一瞬で素粒子レベルで浄化する風を起こす』ことのできる扇子なんです♪」

依姫「！なんとそんなものまで作っていたとは！」

豊姫「フフツ凄いわねえ♪」

正義 「それは僕からのプレゼントです。大切にしてください♪」
依姫 「ありがとな正義君♪」

豊姫 「大切にするね♪」

「どうやら気に入ってくれたみたい

さて次は・・・」

細愛親王 「おや、五十嵐殿」

正義 「あ！細愛親王様！どうもです！」

まさか細愛親王様から来るとは・・・

とにかく細愛親王様へのプレゼントを渡さないと

すぐにリュックから依姫お姉様と同じ長い箱を取り出した

正義 「細愛親王様！こちらをどうぞ！」

細愛親王 「ほう、これを私に？」

正義 「はい！どうぞお開けなさってください！」

箱を開けその中にあつたのは、鐔辺りが普通のとは違う刀であつた

細愛親王 「ほう、なかなかよい刀ではないか。それにかんりの力も備わっているな」

正義 「はい！所有者がその刀に『氣』を送り込むと刃に青き剣気を発する様作りまし

た。その剣気を浴びた妖怪は使用していた妖術を使用不可能にすることができるので

す。まさに細愛親王様しか扱えない名刀です」

細愛親王「はっはっはっはっ！この武器、気に入ったぞ五十嵐殿！」

正義「ありがたき言葉です！」

凄！凄く嬉しい！

まさか細愛親王様に褒められるとは！

もう今すぐに死んでもいいくらい

都久親王「おやおや、随分と楽しそうですね五十嵐殿」

正義「都久親王様！」

そこへ都久親王様がやってきた

あれ？なんかちよつと顔が険しいですね

都久親王「五十嵐殿、一つお聞きしてもよろしいでしょうか？」

正義「はい、何でしょうか？」

都久親王「五十嵐殿、其方は・・・権力が欲しいですか？」

いきなり聞いてきたのは権力の事についてだった

何でそんな事を僕に聞いたのかなあ？

それは都久親王様が持つべきものの筈なんだけど

だから僕はすぐに答えた

正義「……僕には権力を持つ資格はありません。僕はただみんなが安全に暮らせる様にしたい為に開発しているだけです。権力は都久親王様が持つのが相応しいかと思えます」

都久親王「……そうですか、すみませんが今のことはお忘れください」

正義「?、はい」

忘れてくださいって

何だったんだろう?

まあいいや、そろそろ戻ろう

正義「ではこれにて」

都久親王「ええ、また」

都久親王「細愛殿、これにて明白しました。五十嵐殿は我々の邪魔をする気は無い様です」

細愛親王「ええ、それが五十嵐殿です。彼はまさに我々の役にたつでしょう。必ず八意殿から奪い取つてみせましょう」

都久親王「ええ、ですがその前にこの移住計画が成功する事を祈りましょう」

今僕は会場から少し離れたところで星を見ていた

この地上で星を見られるのは今日で最後なんだろうなあ

それにしても、さっきの都久親王様の言葉の意味、一体なんなんだろう

まるで僕と都久親王様は政敵関係をしているみたいなの……

いやいや！僕は憧れの方と敵対なんて嫌だよ！

そうであつてほしい……

？「あら、正義」

あ、この声は……

その声の方を見ると、濃い紫の髪をしており、神々しい飾りをつけて、服装は高貴な和服であつた

その姿を見て忘れるわけがない

僕を永琳お姉様が拾ってくれてから一緒に育ててくれた方、月夜見様だった

僕の横に来た月夜見様と一緒に星を眺めていた

正義「月夜見様！こんばんはです」

月夜見「フフツ相変わらずお固いわねえ」

正義「え？そつそうですか？」

言われていることはわかつているよ

だって月夜見様、とても綺麗なんだもん

小学生ぐらいである僕でさえも綺麗と思ってしまうほどの姿

明らかに都市の男達みんなも恋に落ちてしまうほどだよ

月夜見「正義と出会った時、私は貴方と出会ったのが運命だったと思つたわ」

正義「ほえ？」

月夜見「貴方は間違いなく民を良き道へと導いてくれると、貴方の目を見てそう思つたわ」

正義「・・・確かにその通りになりました」

月夜見「ええ、貴方が永琳以上の兵器や道具を発明したり、貴方が使う数々の仮面の鎧、その力で都市に侵入した妖怪の討伐。貴方がやってきたことはどれも民を守る為にやってきたことだったわ」

正義「僕はただみんなを守りたかつただけです。大好きな都市のみんなが安全に暮らしていただける様にと願いながら。ずっと・・・」

月夜見「ええ、だから私は貴方のことが好きよ」

いきなりのことに僕は一瞬戸惑っていたけど、すぐに月夜見様はみんな好きだと思つた

すぐに普通に接した

正義「ええ、皆んな月夜見様のことが好きですよ」

僕だけでなく皆んなだって月夜見様のことが好きですものね

と思つていたけど、月夜見様は僕の方へ向いた

え？何をする気なのかなあ？

月夜見「確かに私もこの都市の皆んなはことを好きと思つているけど、貴方に対する気持ちは違うわ」

正義「え？」

すると月夜見様はその手で小さい僕の体を持ち上げて、抱きついた

かつて今よりもとても小さかった僕を抱きかかえてくれたあの時の様に

そして……

月夜見「正義、私は貴方に初めて会つた時から貴方を愛している」

正義「!？」

月夜見「この計画が全て終わつたら、私は民に権利を与えようと思つているの。その後は月の都で正義と静かに……一緒に暮らしていきたいの」

正義「月夜見様……」

月夜見「貴方と一緒に楽しく喋ったり、一緒に寝たり、私たちの子供を作ったりして暮らしていきたいの。だからお願い、私と結婚してください」

信じられなかった

こんな僕に月夜見様が恋に落ちてしまうなんて

でもそれは僕も同じ……小さかった頃から僕も月夜見様が……大好きだった
尊敬だけでなく、月夜見様への純粋な恋もあった

今それを言われた時、とても嬉しかった

いつの間にか僕の目からは一粒の水滴が下垂れ落ちていった

その後も目から水滴が現れては下垂れ落ちていったが、僕はその顔の状態で笑顔を作り、こう言った

正義「……宜しく願います(涙)」

月夜見様が望んだ言葉^{理想}を僕は言った

そしてその言葉を聞き入れた月夜見様は僕と同じ目から水滴が現れた状態で今まで見たこともないぐらいの笑顔を見せてくれた

月夜見「……ありがとう(涙)」

お互いの愛を誓った後、僕と月夜見様は顔を近づけてそのまま交わった

その光景を見たものはこう思っていたと思う

この計画が終わった後に彼らには幸せな暮らしが待っていると・・・

—————

源八郎サイド

くっ！いよいよ明日が計画の実行日だ

これまで俺はあいつを消す為に色々とやって来たが、あいつの周りには、いろんな奴らが出た為失敗に終わって来たしまった

このままでは俺の目的、『権力を手にいれる』ことができなくなってしまう

ここまで来てしまったら、最後のアレに賭けるしかない

陛下「源八郎、奴はどうかの？」

源八郎「陛下、申し訳有りません。これまで奴を消す為にやって来ましたが、奴の周りには月夜見様をはじめ、八意殿に、都久親王様、綿月姉妹等の多くの貴族に、民は奴を信頼している為消すことができませんでした」

陛下「むむっ、これでは儂の権力は奴に取られてしまうではないか」

源八郎「ええ、しかしご安心ください。明日の移住実行の時に必ず奴を消せる作戦を用意いたしました。必ず成功します。奴なら誰も死なせずに守り抜こうとする為、自ら

犠牲になるでしょう」

陛下「なるほど、源八郎お主も悪よのう」

源八郎「ありがたき言葉です」

明日になれば奴、五十嵐正義も終わるであろう

全て終わった後はその次は、お前^{陛下}だ

奴を始末した後はお前も始末してこの国は俺のものとなる

そうなれば地上も月も操れる

俺はただの貴族から最強の神になれるのだ

くつくつくつくく・・・

—————

???
サイド

妖怪1「おい、いよいよ明日が人間どもが月へと行くみたいだぞ」

ここは都市から少し離れた森の中

そこで集まっていた妖怪の一人が、月移住計画のことを話し始めた

妖怪2「おい！何故そんな話を知っているんだ？」

妖怪1「ああ、それがさつき俺の元に一人の人間が現れて、その計画について話し始

めたんだ」

妖怪3 「つで？その人間は何て？」

妖怪1 「ああ、それが『月移住の時、都市へ攻め込んで人間を食らっても良いぞ』つと言っていたんだ

妖怪2 「そいつ本当に人間か？俺たちよりも化け物じゃねえか。同じ人間のくせに」

妖怪1 「まあ、いいだろう。つで？お前らはこの話をどう思う？乗る気か？」

その言葉を発した妖怪だったが、周りの妖怪は考えもせずすぐに発言した

妖怪3 「あつたりまえだ！俺らは人間を食らう者だ！」

妖怪4 「俺はすぐに仲間どもに知らせてくるぜ！」

妖怪2 「ああ！早く人間を食いたいぜ！」

妖怪1 「では、俺らはそれでいいな？」

妖怪3 「あつたりまえだ！こんなチャンス逃すわけにはいかないだろう！」

妖怪1 「では、明日始めようか・・・」

人妖大戦を!!」
続く

第十一話 運命の日 人妖大戦

あの前夜祭から帰宅した僕は色々と考えていた

都久親王様が言っていた『権力』は一体どんな意味を込めて言ったのか

だって僕には権利を持つ資格はない筈

だって権利を持てるのは都久親王様の様な王族だけだし・・・

もしかして別のことで言ってたのかなあ？

・・・まあそこは別にいいか

それよりもまさか僕が都市を治めている月夜見様と結婚することになってしまおうと

は・・・

正直言つて凄く嬉しい

だつてあんなに綺麗で美しい月夜見様と一緒に暮らせると思うと・・・

それに一緒に寝たり、子供も作ろうと月夜見様から言われてしまった

今僕の顔はどんな顔をしているだろうか

いや多分このことを思い出してからなんか暑いから顔はとても赤いだろう

うう、嬉しいけどやっぱ恥ずかしいなあ・・・

永琳「正義？いるの？」

正義「あ、今いますよ」

永琳お姉様が来たみたい

実は永琳お姉様にもプレゼントを用意してたんだ

でも会場で渡すのを忘れてしまったから今それを渡そうと思ってたんだ

僕はすぐにさっきのリュックを取り出して、中のものを漁り始めた

・・・もうここまででみんなは疑問に思っていると思う

『そんなリュックにどうして刀などが入れるのだろうか？』つと

実はこのリュックはただのリュックではなく、僕が作った大量収納可能リュックなのだ

このリュックの中は四次元空間に繋がっており、その空間に物を収納することが可能となっているんだ

一言で表すと四次元ポ●ットだね

永琳「正義、私に何か用かしら？」

正義「そうそう、実は永琳お姉様にこれを渡したくて・・・」

永琳「？」

僕はかなりのおおきな箱を取り出すと僕が箱の中身を取り出した

その中に入っていたのは、一つは永琳お姉様が使っているのとは違う弓矢
矢の木部分には結んだリボンがつけられており、かなりの力が感じられる
そしてもう一つは、衣装

永琳お姉様の着ている服と同じ色と所々に星座が描かれたナース服

これは永琳お姉様を持つ『あらゆる薬を作る程度の能力』を考えて作ったものなんだ
永琳「!?この弓矢は!?それにこの衣服も!?!」

正義「うん、この弓矢は今使っている弓矢よりも強い力を持っているんだ。そしてこ
の服は永琳お姉様の能力のことを考えて作ってみたんだ♪気に入ってくれたかなあ?」

永琳「正義……(涙)」

あ!お姉様が泣いている

笑いながら泣いている

やっぱ嬉しいんだなあ

作っておいて良かったあ

—————

永琳サイド

私にプレゼントを渡してからしばらくして正義は自室で寝ていた
起こさないように開けて、正義の眠るベットの横へ行つた

正義「すうく、すうく」

いつもの様に無防備に眠っている正義の顔であつた

この子は本当に眠るのが好きねえ

あの時、私が拾つて来た時から・・・

でもそんな子からあんな素敵な贈り物を用意していたなんて

・・・やっぱり私、この子のことが大好きだわ

この子の全てが欲しい・・・

この子との結晶子供が欲しい・・・

例えこの子の命を狙う者がいても、私がそいつを消し去りずつと居られる様にしてあげたい

永琳「・・・正義、愛してるわ」

私は寝ている正義の顔を近づけて、私の唇とこの子の唇を重ねた

とても甘くて、暖かい感触だつたわ

またこの感触を月に行つた後でもしてあげたいわ

・ ・ ・ ついにこの時が来た

今日が地上との別れで、僕たちは月へと行くのだった

今まで住んで居たこの家とも今日でお別れだった

この家に拾われて、今日まで無事に育ってこれたなあ・ ・ ・

永琳お姉様は既に荷造りを終わらせていて、もう何も残っていなかった

僕はあのリュックに生活に必要なものを収納して、ライダーシステムなどと一緒に僕が作った亜空間収納に入れた

カービイも一応安全のために亜空間収納に退避させた

だから今の僕は何も持って居ない、手ぶらだった

でもそれのお陰で永琳お姉様の荷物を運ぶことができる

永琳「正義、着いたわよ」

正義「これが僕たちが乗るロケット・ ・ ・」

目の前にあったロケットは貴族専用のロケットであり、大きさも他のロケットよりも大きかった

まさに身分の差って所かなあ？

そんなこと言っている間に僕は既にロケットの中に入り、席について居た

月夜見「いよいよね・・・」

正義「月夜見様・・・」

僕の隣に月夜見様が座って来た

やっぱり、顔を見てしまうと昨日のことが意識して顔が赤くなってしまふよ（汗）

永琳「ええ、この地上とも今日で・・・」

とその時

ビー！ビー！ビー！

突如、警報機が鳴り始めた

まさかシステムにトラブルでもあったのかなあ？

でも、それは違った・・・

『只今都市へ向けて妖怪どもが接近中！軍は直ちに戦闘準備に入り、住民達は直ちにロケットに乗ってください！』

正義「!？」

まさかこんな時に妖怪達が攻めてくるなんて

僕はすぐに作った『人妖センサー』を発動させた

このセンサーは人間と妖怪の位置情報と数を確認することができる装置なんだ

つまりこの機械で軍の人数と妖怪の数がどのくらいなのかを見るんだ

お！見えて来た、さて、どれくらいの妖怪がここに攻めてk

正義「!？」

嘘でしょ!？」

このセンサーで確認できた妖怪の数は、全部で約10億体

つまりこの地上にいる妖怪全てがこの都市に攻めて来た様だ

それに対して軍の人数は確認できた所だと約50万人

黒影ドルーパーシステムによって死ぬことはないと思うけど、このままではその人達はこの都市から脱出することができない

・・・僕がみんなを守らないと！

バツ！

月夜見「正義！どこへ行くの！」

正義「みんなの所へ！助けに行つて来ます！」

永琳「駄目よ！戻つてらっしゃい！」

永琳お姉様、それはできません

だって僕は・・・この都市にいるみんなが大好きだもん！
誰一人・・・死なせない！！

――――

外へ出て見ると壁の方で戦いが起きているみたい

ドゴーン

あ、僕が乗っていたロケットは既に発射して行ったみたい

他のロケットは既に全部行っているため

あと残っているのはハルバードだけ・・・

でも、みんなが生き残るためには・・・誰かが時間稼ぎしないといけない

仕方ない、このアイテムを使うしかないか

原作には無かった変わった変わった絵柄がついたこのメダル型のエネルギーアイテムを・・・

永琳お姉様、月夜見様、ごめんなさい・・・

流月サイド

流月「くそっ！キリがないぞ！」

まさかこんな時に妖怪が攻めくるなんて

しかも何だよこの数！

尋常ではない数だよ！

依姫様も豊姫様もさすがに疲れて来たみたい

俺はクローズ、兵は黒影になっているから、何とか守っていられるけど、このままで

は皆んな殺られてしまう

でも絶対に諦めない

依姫「流月！私たちのことはいいいから早く！」

豊姫「このままではあなたも！」

流月「何言ってるんですか！このままだと後で先生が悲しんでしまいますよ！絶対に

お二人は守ってみせます！」

例え無理でも、絶対にこいつらから・・・

ビュッ！

パキーン

流月「なっなんだこれ!？」

突如後ろから何か俺の中入って来た

俺だけでなく依姫様、豊姫様、全ての兵に何かが……
入って来たにもかかわらず何故か痛くはない

一体何が？

正義「はあはあ……何とかなつたあ」

流月&依姫&豊姫「正義(君)!!」

何であいつが!？」

だつて正義は先生と一緒にあのロケットへ……

正義「もう大丈夫。みんなこの地上から出られるよ」

流月「本当か!？よし!ならお前も……」

正義「いや、皆んなとはここでお別れだ」

!？」

なっ何だこれ!？」

体が少し透けている……

正義「さつき入って来たのは、これなんだ……」

正義の手にあったのは、虹色のメダル

絵柄があつて、下半身がなく、別の所に下半身があるという奇妙な絵柄だ

正義「これエナジーアイテム、『テレポート』。対象物をその場所にテレポートさせるものなんだ。これによつてみんなはここから別のところにテレポートできる」

流月「だったらお前がそれを使つて・・・」

正義「いや、これは場所を特定するためのものであつて、使えるものではないんだ。それにさつきのアイテムはみんなので全部なんだ」

流月「!?じゃあ、それは・・・」

正義「こうするんだよ!」ビュツ!

正義はそのメダルをある場所へ投げた

その場所は俺たちが乗るハルバードだった

つまり・・・

パアツ!

流月&依姫&豊姫「「!?」」

下半身が完全に透けた

まさか!?

正義「これでみんなはあの船で、ここから脱出できるよ」

依姫「馬鹿!正義!一緒に来るんだ!」

豊姫「正義君！」

正義「依姫お姉様、豊姫お姉様、皆さん、ご無事で・・・」

そのまま依姫様達はその場から消えた

恐らくあの船にいるのだろう

正義は残っている俺に近づいて来た

正義「流月君、ごめんね。皆んなを守る為には誰かが時間稼ぎしないといけないの。だから僕が皆んなを守るために・・・」

流月「正義、お前・・・」

すると正義は腰からあるものを出した

俺が持っているビルドドライバーと同じ腰に付けるやつと何かの容器だった

正義「流月君、渡しそびれたけどこれあげるね。これは今の流月君の力をさらに強くするものなんだ。でもこれは覚悟を決めないと使えないから気をつけてね」

流月「・・・」

正義「じゃあーーーーー」

「……皆んなを頼むね」

その言葉が聞こえた瞬間正義の姿が無く、見えたのは依姫様達がいる戦艦の操縦室だった

俺の手元には今さつき正義からもらったベルトとフルボトルとは違う容器を手にしていた

「……」
これで皆んなを脱出できた

ハルバードも無事に出発できたみたい

さて……僕は……

妖怪「おい貴様！余計なことをしやがって！」

「せっかく人間を喰らえると思ったのによ！」

「お前ら……いつをぶち殺せ！」

殺つてやるよ

僕の最高傑作によって、自分の正義を……自分の答えを貫いてみせる

僕は一つのバックルを取り出すと一枚のカードも一緒に取り出し、バックルの中に入れた

そのまま腰に付けると横からカードが出て来てそれがベルトへと変わった

そのまま変身のポーズをして、こう叫んだ

正義「変身！」

『Turn Up』

掛け声と共にバックルの横にあるターンアップハンドルを引くとカードが入っていた部分が回転する

するとそこからアーマーを分解した等身大のカード型エネルギーフィールド『オリハルコンエレメント』が展開される

妖怪はそのままオリハルコンエレメントに突っ込むと、そのエネルギーによって、絶命した

僕はそんな状況で同じくオリハルコンエレメントに突っ込んだ

そのまま突っ込むと絶命せず、代わりに別の姿になった

外観は西洋騎士彷彿させて、顔はスパード（♠？）をモチーフにした仮面
身長は相変わらず変身前よりも高くなっていて、カラーは青と銀であった

この姿は最高傑作『仮面ライダーブレイド』であった

運命に立ち向かった主人公が変身した仮面ライダーだ

妖怪「てめえ！一体何者だ！」

その言葉に答える前に僕は一枚のカードを武器『醒剣ブレイラウザー』から取り出し、
ラウズした

『Slash』

その音声と共に、斬れ味を増した剣を横に振り目の前の妖怪を一刀両断した

斬られた妖怪はすぐさま息絶えていた

その後にごう答えた

正義「僕は『仮面ライダー』！人々の自由を守る存在だ！」

サア来いよ妖怪ども

僕がまとめて血祭りにあげてやるよお！

続く

第十二話 滅亡の切り札

ハルバード内

司令官「何!? 五十嵐殿がまだ地上に!？」

依姫「そうなんだ!! 頼む!! 彼を救出してくれ!!」

豊姫「お願い!! あの子を助けて!!」

司令官「わっわかりました!! 船員に次ぐ! 原子爆弾の投下はすぐ様停止せよ!!」

バツ!

兵士「司令官!! 先ほどこちらセンサーを八意様からお届けになりました!!」

司令官「!? これは!？」

兵士「この反応からして、五十嵐様に違いありません!!」

依姫「まだ地上で戦っているんだ!! 急げ!! 彼を救出するのだ!!」

司令官「皆! 英雄を助けるのだ!!」

兵達「了解!」

『Tackle』『Upper』

正義「はあっ！」

ドゴツ！

妖怪共「「グアアアアア!!」」

「野郎！狼狽えるな！何としても殺せ!!」

今僕は地上に残り、都市に攻めて来たクズ共と戦っていた

『Tackle』で突進力を上げて、更に『Upper』でパンチ力を上げた

ちなみにラウズしたカードの中に『Upper』と聞こえたけど、本来はこの『アツ

パー・フロツグカード』は仮面ライダーギヤレンが持っているカードである

何故持っているかという、このブレイラウザーはブレイド、ギヤレン、カリス、レ

ンゲルの持っている全てのラウズカードを収納することが出来る様に改造したんだ

アンデットも全て自分で作って、封じ込めているんだ

意外と皆んな僕に対して友好的だったから、その力を使わせてくれてるんだ

さらに原作では技発動にはAP（アタックポイント）が必要でこれによって技を発動

させることができる

でも技を使用するたびにAPは減っていき、そのAPが不足してしまうと技を発動さ

せることができないんだ

だから僕は、APを消費しない様に改造したんだ

そのため技発動し放題

やったね♪

でも倒してもすぐに別の妖怪が来る

あの技を発動させようかなあ

僕は三枚のカードを取り出しすぐにラウズした

『Kick』 『Thunder』 『Mach』

『Lightning』 『Sonic』

技が発動させた瞬間、助走をつけた後高くジャンプし、稲妻の力を帯びた右足でキッ

クをした

正義「ウエーイ!!」

「「うわああああ!!」」

この攻撃を受けた妖怪は稲妻によって塵となっていた

それでも攻撃は緩まない

一体の妖怪の攻撃が目の前に・・・

『Metal』

すぐにラウズしたこの『メタル・トリロバイトカード』の力によって体を鋼鉄に変えた

攻撃した妖怪はその鋼鉄にぶつけるとあまりの痛さに苦しみ始めた

その隙に斬り裂いた

「お前らー！一斉攻撃だ!!」

そんな攻撃も無駄だよ

今度はこちらだ

『Time』

このカード『タイム・スカラベカード』を発動させると自分の周りの動きが止まった

このカードは時間操縦が可能なカード

その時間操縦で自分以外の時間を止めることができるんだ

つまり仮面ライダーでの『ザ・ワールド』つとということ

すぐさまその攻撃の間を通り抜けて、その後能力を解いた

グサグサグサ

僕に攻撃しようとした妖怪は同志に攻撃する様な感じになりお互い絶命した

さて、第二の技を使おうか

再び別の三枚のカードを取り出し、ラウズした

『Drop』『Fire』『Gemini』

『Burning Divide』

ジャンプと同時に二体に分身した僕は、大回転しながら炎を纏った足でドロップキックを繰り出した

もちろん当たった妖怪は先ほどと同じく塵になった

でも、まだまだ

第三の技発動

『Float』『Drill』『Tornado』

『Spinning Dance』

体が少しずつ浮上し激しい竜巻を起こして相手に向かって回転キックを繰り出した

この技はドリルとしても、使われているため当たった妖怪は突き抜けてそのまま絶命した

突き抜けては新たな妖怪を突き抜ける

気が付けばこの技で何十万体もの妖怪を撃破させた

さらに新たな技を発動させた

『Bite』『Blizzard』

『Blizzard Crash』

再びジャンプし、足から発した冷気を妖怪に浴びさせた

冷気を浴びた妖怪はすぐに凍りづけとなった

とそこへ、挟み蹴りを繰り出した

食らった妖怪は氷ごと粉々となった

ここまで多くの技を繰り出して来たけど・・・

正義「はあ・・・はあ・・・」

妖怪「へへっ、どうやらテメエはここまでの様だな！」

まずいなあ・・・

妖怪の数があまり減っていない

それに対して僕はかなり体力が消費している

このままではやられてしまう

何か強い力を持つカードはあるだろうか・・・

・・・

あ！これがあった

そのカードは周りが黒と中心に緑のハートの様な模様が描かれたカードだった

このカードは原作で、最強の切り札、と言われているアンデット『ジョーカーアン

デット』が封印されたラウズカードだった

このカードの力は手に入れば、あらゆるアンデットの能力が使用できるという、即ち最強となれると言われている

しかし、僕が作ったこのカードは何故かバトルファイトに生き残った時に発動する力が使われる事になっていた

説明すると、アンデットというのはブレイドの世界で存在する生命体の祖であり、一万年に一度開催される繁栄を賭けた戦い『バトルファイト』が行われる

その中で最後の一人となれば、統制者から万能の力を授けられる

しかし、どの生命体の祖でもないジョーカーアンデットが最後の一人となれば、世界のリセットとなり、その世界の生き物を消滅させるのであった

そして僕が今持っているこのカードは勝者となったジョーカーの時の様に地表全てが光に包まれあらゆるものを消し去るのであった

もちろん、この力を使えば僕も無事では済まされない

ここは一か八か賭けに出てみよう

スツ…

妖怪「おっおい！なんだそれは！」

妖怪の一匹が手にしたカードを見て、震え始めていた

やっぱりこのカードから発する力を感じられるんだ

正義「この力で僕ごとお前らを消し去ってやる！」

妖怪「正気か!? テメエ!？」

僕はジョーカーラウズカードをすぐさまラウズした

『Joker』

ラウズした瞬間、ブレイラウザーの刃が白く輝き始めた

これを使えば、地表にいる妖怪、この都市を全て消し去ることができる

元々、この都市は月へ行つた後、核爆弾を落とすつもりだった

その理由は、その文明を後者の手に渡らない為であった

それならば、この技を使つても

正義「ジョーカー! その力で地表のもの全てを消し去るんだ!!」

そう叫んだ僕は刃を地面に突き刺した

妖怪「お前ら、奴を止めr・・・」

その妖怪の言葉を最後に周りが白い光に包まれた

僕の周りにいた妖怪、そしてこの都市、地表にあったものはこの時に全てが無に帰っ

てしまった

そして僕までもが、無に帰そうと襲ってくる

そうまさに、全てがリセットした様に・・・

依姫サイド

なんたることだ！

この私が弟の様に可愛がつて来た正義君を置いてくる様な事になってしまふとは
今も正義君は地上で一人だけで戦っている

正義君のずっと側にお師匠様を悲しませてはならない
私もお姉さまも正義君の救出に向かう事にした

依姫「早くするんだ！こうしている間も正義君は！」

兵士「準備できました！直ちに地上へと向かいます！」

豊姫「急いで！」

これで正義君は救える

私は愛する正義君をこの手で救えるんだ
待っていてく r

カッ!!

依姫「なっ!?!何だ!?!」

突如地上が光に包まれた

未だに原子爆弾の投下の許可は降りていない
では、一体何が？

と思っっていたらその光はすぐに収まっていった

兵士「!!五十嵐様のレーザーから妖怪の生体反応が全て消えています!!」
まさか、あれ程いた妖怪を全て正義君が倒したのか

依姫「なら、早く救出にいk」

兵士「しっししかし、それと同時に・・・

五十嵐様の反応も消えています」

そんな・・・馬鹿な・・・

正義君が・・・死んだ？

こんな結末が待っていたのか？

こん・なの・・・ない・・・よ・・・(涙)

—————

月夜見サイド

兵士「月夜見様、悲しいお知らせです。五十嵐様が・・・消滅してしまいました」

月夜見「・・・」

私は今の状況を信じられなかった

私と一緒にいてくれる筈だった正義はこの世から消え去ってしまった

全ての民と兵を守るために自らを犠牲にして・・・

彼はまさに英雄だったわ

まだまだ小さい子供であつたけど

月夜見「そう……ご苦労様……暫し一人にしてほしい……」

兵士「はっ」

そう言った後、兵士は私の部屋から出て行つた

すると、私の中から何かが込み上がってきて……

月夜見「う……ううっ……」

涙を流していた

あの時、今よりも小さかつた正義を見たときから恋に落ちて、そして昨日告白が成功して、幸せな時を過ごせると思っていた

でも、もう正義はいない

大切な民の命を引き換えに

正義は……

—————

永琳サイド

正義が死んで3日が経つた

あの謎の爆発の後、教え子の依姫と豊姫が一時地上に戻った時には、私たちが住んでいた都市も近くの森も何も残っていないかった

そこにあつたのは彼方まで続く砂の大地

まるで、死に絶えた大地であつたみたい

その後、正義の遺体は発見されず、あの爆発で正義は体ごと塵なつてしまったという結果になつてしまった

この報告に全ての民は涙を流していた

私とは政敵である都久親王までも

自分たちの命の為に死んでしまったのだから、当然のことであつた

私はこの報告の後、1日中泣き叫んでしまった

私が初めて恋してしまった

ずっと居たかつた

そんな大切な存在だつた正義が死んでしまったのだから

でも、そんな事をしていたら正義は悲しんでしまうわ

だから、私は決めた

正義が守ってくれたこの命、決して無駄にはしないと

二章 鬼子母神との遭遇

第十三話 穢れの弾く葉

どうも、最近怪我するのが嫌になって来た正義です

さて僕はあの時ジョーカーの力で地上にある妖怪や建物を消し去ってしまいました
まあ、でもあくまで地表だけだからもしかしたら地下にいる生き物や妖怪は生き残っ
ている可能性はかなり高いと思う

え？僕は何処にいるのかって？

今僕は……

こんな家具だけが置いてあってそれ以外何も無い真っ白な空間の中にいます
ここは僕が作った簡易型聖空間

穢れない為、歳をとることもない空間

まあ、要するにここは人工の浄土的な何かかなものだね

一応、ジョーカーの力を発動させた瞬間にこの空間に入るとい賭けに出たけど、こ

の様に生きているから成功だね

それはさておき、今僕はお腹が空いた為、カービイと一緒にU●Oを食べていた
ああ、この麺についているソースと野菜が本当に美味しいなあ

カービイの方は大きくすることが出来るライト『ビツ●ラ●ト』を使って、十倍ぐらい大きさにした

正義「カービイ、美味しい？」

カービイ「ぽよっ！」

美味しそうに麺を頬張っているなあ

やっぱ可愛いなあ

さて食事も済んだところで……

正義「これからどうしようかなあ？」

今地上は穢れに満ちている

都市があつた所もすでに穢れに満ちている

このままこの空間から出てしまつたら歳を取つてしまふ

だからと言って、こんな殺風景な空間にはずっといたくない

どうすればいいのだろうか？

正義「んー、前に不老不死を作ったって永琳お姉様が言っていたけど、話によれば服用すると穢れが生まれるとか、あと赫映様の力がないと作れないとも言っていたし

……」

んー、せめて体に穢れを取り込め無なければいいんだけど……

んっ!?穢れを取り込めない

そうだ！それだよ！僕の体に穢れを取り込まれない体にすればいいんだ

後はどうすればその様な体にできるかなあ……

あ、前に泥等の汚れを寄せ付けない液体状の薬を作ったことを思い出した

あれを少し改造して、薬も固体型にして服用しよう

そうと決まれば、すぐ行動開始だ！

—————

正義「つつ疲れたー(汗)」

いやー、やつぱり薬物作りは僕には余りにも難しいなあ

永琳お姉様が教えてくれなかったら、こんな薬を作ることなんてできないなあ

という訳で出来上がったのが服用すると穢れを弾くことができる薬

見た目は A●TX4●69に似たカプセル剤

そこは気にしないでほちい

さて、早速これを服用しよう

僕はすぐ様カプセルを飲み込んだ

正義「ぐっ!?!」ガクッ!

やっぱりこうなつたね

今僕は薬の力で体の構造が作り変えられているんだ

その為、今物凄い痛みが僕に襲いかかってきた

やばい……意識が……

正義「あ……ああ……」

「……よ……ぼ……」

正義「……ん?」

カービィ「ぼよ……(涙)」

正義「あ、カービィ。ごめんね心配かけちゃって」

僕はどうやら激痛の中、気絶していたみたい

それを心配してカービィが側にいたみたい

さて、ちよつと今自分がどんな顔をしているのか鏡でのぞいてみようかなつと

正義「んー、別に髪が変わったり目も変わったりなどのことは無いみたいだなあ」

なんかこういうものが出てくる お話ではこういう薬を飲むと体の一部が変化するのを見た事があるから心配になつたんだ

でも結果がこれなら大丈夫みたいだ

さて、明日には再び地上へと出てみようかなあ？

僕が消し去った地表はどうなっているのか気になるし

続く

第十四話 生き残りの鬼人

正義「じゃあ、僕はいってくるね」

カービー「ぼよっ…」

正義「ごめんね、まだ地上が安全かはわからないからカービーはここにいてね」

穢れに取り込まれない体^{改造}にした僕は今日再び地上に出る事にした

しばらくこの空間で過ごしているからちよつと気持ち悪いなあ

そうなるど久しぶりの地上の空気を吸えるから早く行きたいなあ

でも、まだ地上が安全という訳では無いからカービーはまだこの空間に残す事にした

まあ、僕が消し去ってしまったから多分危険でも無いと思うけど

正義「少ししたら、出してあげるからね」

カービー「ぼよっ！」

よし、カービーも少し機嫌が良くなった

これで少しは僕も安心したかな？

正義「いい子にしているんだよ」

カービー「ういっ！」

そう言つて僕は地上へと繋がっている穴へと入つていった
いぎ！再び地上へ！

正義「うわっ！何にも残っていないや」

最初に出てきた発言がこれであつた

しようがないよ

だつて、出てきてそこに見えていたのは、都市があつた場所にはその痕跡もなく、ただ砂漠が地平線まで続いていた

しかもこの砂、とても白いなあ

まるで電王の黒幕『カイ』が劇中で消し去つた世界の様な感じだつた

正義「ここが僕が住んでいた都市とは思えないなあ」

まあ、僕がジョーカーの力を使わなくても、核を落とした後この光景にはなるんだけどね

これくらいの状態だと再び命が溢れる世界になるには何億年は掛かると思う

それまで、何でもできるなあ

これからは他のサブライダーの開発もしたり、強化アイテムも作つたりしようかな

後は、アンデット以外で平成ライダーの中で一つ、怪人を作ったりしてみようかなそんな考えが溢れてきた

？「おや、私以外にも生き残りがいたのね」

正義「!?」

いきなり後ろから女性の声が聞こえてきて僕はビククリしてしまった

全て消し去ってしまつたこの地表でまさか生き残りがいたなんて

しかもこの気配……間違いなく妖気だつた！

まさかジョーカーの影響を受けていないのか！

僕はすぐさま声がした方向に顔を向けた

そこにいたのはポニーテイルをした橙色の髪に上半身は着物の様な和風のものをつけているのだけど、下半身が何故か洋風のロングスカートをつけていて、その手には巨大な金棒を持っている女性の姿が僕の目の前にいた

大体を見れば、身長がとても大きい女性だけど、細かい部分を見れば、頭には三本の角を生やしていて、口の中にはまるで入れた物を噛み千切れそうな牙を持っていた

それを見て僕はこの女性が何者なのかすぐにわかつた

……この女性は、恐らく『鬼』だ

僕が変身するライダーの一つ『響鬼』とは違って正真正銘の『鬼』だつた

とりあえず警戒しておいて、あまり刺激を与えない様しないと

いくら上級妖怪を倒した僕でも、今の僕に鬼を倒せる程の力を持っていない
何とかして戦いだけは回避しないと

正義「……どうして貴女がここにいるのですか？」

？「あのわからない光に包まれたと思つたら私以外消えていたから、どうしたもんか
と思ひ、光が発生した所に行つたらあんたがいたのよ」

正義「そ、そうですか……」

どうやらあの光を浴びてもこの鬼は消滅させる事ができなかつたみたい

上級妖怪でさえも消し去る事ができるジョーカーの力を耐えられるという事は、上級
妖怪の中でもかなりの力が持つ妖怪だと思ふ

正義「……それで……貴女の名前は？」

？「おっと、私の名前は鬼城剛という、お前の名前は？」

妖怪相手に僕の名前を言うのは嫌だけど、今は状況によるから名乗らないと

正義「……五十嵐正義」

剛「ほう、正義というのか。いい名前じゃないの」

正義「……それはどうも」

今の所、この妖怪は不機嫌の様子は見られない

このまま何事もなく終わって欲しいなあ

剛「あ、そうそういきなり出会って、頼みがあるんだけど」

正義「あ、はい。何でしょうか？」

剛「私と殺し合おいしてくれないかなあ？」

正義「……………えっ？」

もしかしたら僕はこの後、死んでしまうかもしれない……

……やっぱり運命は大っ嫌いだなあ……

続く

第十五話 清めの鬼 V S 最強の鬼

剛「私と殺し合いお話してくれないかなあ？」

正義「……………えっ？」

いきなりの果たしに僕は直ぐに混乱してしまった

だって僕、何か不機嫌にしてしまう様なことを言ってしまっただろうか

正義「え？え？なっ何故殺し合いお話をすることになったんですか？」

僕は不思議でならないので、本人にその訳を聞いてみた

剛「何故かって？それはもちろんお前が強い力を持っているからだよ」

正義「……………ほえ？」

あれ、別に不機嫌ではないみたい

それに今言っていた強い力ってもしかして仮面ライダーのことかなあ？

そう思い、僕はビルドドライバーを取り出した

正義「それってもしかして、このベルトのことかな？」

そのベルトを見ると、剛は『何か違う』という様な顔をしていた

剛「んん、確かにそれから強い力を感じるが……私が感じたのはそれだな」
そう言つて、剛はその力が感じる所を指差す

差していたのは腰辺りにつけている『変身音叉 音角』だった

正義「もしかしてこの音角の事？」

剛「それはおんかくと言うのか。とにかくそこから私と同じ力が感じるんだ」

正義「あ、それでどんなものか知りたくて、僕と戦いを望んでたんだ」

剛「そういう事だな」

まあ、不機嫌じゃ無いのは良いんだけど、一応戦いを望んでいるから、僕本当に死んでしまふかもしれない

でもここで断つてしまったら、この後どんな展開になつてしまふか、考えただけで震え上がつてしまった

正義「わかりました、その勝負受けて立ちます」

剛「よし！受け入れてくれる子は私は好きだぞ！では始めるぞ！」

その言葉と同時に僕に向かって拳を下してきた

僕はそれを難なく避けた

正義「うわっ！容赦ないなあ。それじゃ僕だつて！」

僕はすぐに音角を手に取り、角部分を手に軽く打ち付けた

キーン……

角部分が振動し始めたと同時に額に近づけて、鬼の顔を浮かび上がらせる
それと同時に僕の体は紫色の炎に包まれる

剛は一瞬びつくりしていたけど、すぐにその炎が何か違うことに気付いた

正義「ハァー…タァツ!!」

そして右手で体を覆う紫の炎を薙ぎ払った

その姿は人間の姿から異形の姿へと変えた

それは剛とほぼ同じ『鬼』であった

剛「なるほど、その力はやはり鬼だったのか」

正義「確かに鬼だけど、これは邪を祓う事ができるものだよ」

剛「わかった、ではゆくぞ!はあっ!!」

そう言うと剛は再び攻撃を再開した

剛が繰り出してきた拳をすぐさま響鬼の優れた体力で華麗に避けた

そして、少し距離をおいたところで、腰につけていた音撃棒を手にして構えた

正義「さあ、邪を清める鬼の力を見せてやる!」

続く

第十六話 少年よ、闘え

どこまでと広がる白い砂の世界

まるで時間が止まり、何もかもが死に絶えた様な世界の様に

ドオーンツ!!

その中で聞こえてくる地響き

見ると、地響きがあつた所からは、人間ではない二つの存在が戦っていた

一人は、背が高く、角が3本あり、尚且つ人間と同じ体をした人外の女性

女性でもその人外の持つ耐久性と力によって、世界の滅びから逃れることができた

そして、もう一人は、体が紫色、顔に目がなく、頭には二本の見掛けだけで人外であ

る存在

その二人は、今他人が巻き込まれば必ず死ぬほどの戦いを繰り広げられていた

……己の力を示すために



剛「やつぱり、お前は強いなあ。私は強い奴が大好きだから惚れてしまうよ!!」

正義「それはとても嬉しいよつ!!」ゴツ!!

僕たちは今まさに、死闘を繰り広げられていた

剛が放つてきた拳が正義が避けた瞬間、正義がいた場所は小さいながらクレーターができていた

少しでも油断したら、さすがの自分も絶対に死んでしまう!

そう確信した正義は、剛の攻撃をすべて避けて、音撃棒で少しでもダメージを与える

剛「次はこれだ! 『空圧拳弾』」

少し離れたところで剛は空気を殴る様に拳を突いた

すると、その拳が空気弾の如く目の前に迫ってきた

正義「不味い! ハッ!」

正義はすぐさま烈火弾を放ち、空気弾と相殺させた

空気弾は消滅したが、その消滅時の反動により正義は少し吹っ飛ばされた

すぐに体勢を立て直し、相手の行動を観察しようとしたが:

剛「休んでいる暇はないぞ!!」

その瞬間、正義の目の前まで迫っており、その巨大な金棒を振り下ろそうとしていた

よく見ると、金棒が若干赤く発光していた

剛「次だ！『大地の雄叫び』」

発光した金棒が正義に向かって、勢い良く振り下ろした

正義は、これもすぐさま躲すし、この金棒は砂の大地の一部をめり込ませてしまったが、これで終わりではなかった

めり込ませた瞬間、突如地響きが起き、剛の目の前で巨大な火柱が現れた

その火柱は次々に起き、それは正義の前まで来ていた

正義「!?嘘でしょ!?!」

とつさに躲した正義

しかし、その避けた場所からも火柱が起き、その炎は正義を包み込んだ

正義「グアアアアアアッ!」

その力はとてつもないものであった

まるで、僕を燃やし尽くしてしまふ程の火力であった

これ以上いたら不味いと思った僕は、すぐさまその火柱から脱出した

その後、僕の体を見るとが火柱によって火傷をした場所が数多くあった

剛「休んでる暇はないと言ったはずだがっ!!」

正義「えっ?……グハッ!!」

少しの油断により、正義の腹に拳が突き刺さる

更に追い討ちをかける様に、腹を集中に殴り続ける

この時、正義の内臓にもダメージがあり、内出血が起きてしまった

突如、体に違和感を感じた正義はそれを感じた

鬼でもある彼女にやられている為、そうなるのはおかしくなかった

ちなみにこれは響鬼に変身した為で、普通の人間なら必ず死ぬ

正義は鬼火を吐き出し、剛の攻撃を止めさせた

正義「不味いなあ。僕と彼女の力、ハッキリ言ってしまうえば天と地の差と言っても過言じゃない。今僕は内出血が起きてるし、このままいけば、確実にやられてしまう」

今もお続く彼女の攻撃

内部の痛みを堪えながら、彼女の攻撃をかわし続ける

だが、このままいくと正義が負ける可能性は100%

何とか痛みの中で彼女を殺せはしないけど、戦闘不能にする方法を考えた

とここで、正義はベルトのパックル部分に手をつけた

正義「試してみる価値はあるな。それでも彼女は堪えるかもしれないけど、やってみるしかない！」

正義は決心して、剛に向かって走り出した

その途端、内部の痛みがさらに悪化した
それでも、正義は走る

すs腰でも倒せる可能性を信じて

剛「ほほう、何しようというのか……ねっ!!」

剛は向かってくる正義に、今度は数多くの光の玉を発射してきた

しかし正義は、これを余裕に躲していく

そして、目の前まで来た正義に……

剛「ここまで私に来たことは褒めてやろう……だが！これで終わりだ!!鬼神奥義

『豪鉄拳』

剛は自らの拳を、鋼のような物に変えた

その拳を食らったものは、間違いなく死ぬであろう

その拳はそのまま正義の顔に向けて放った

正義「今だっ!!」ヒョイ

剛「なっ!?!」

拳が到達する前に、正義は鬼の身体能力で素早く避け、そのまま剛の腹辺りに……

正義「はっ!!」カチャッ

音撃鼓をつけた

その瞬間音撃鼓は剛の腹の上で巨大化していった

正義はチャンスとして、音撃棒を構えた

剛「なっ！何をやる気だ!!」

正義「音撃打 火炎連打!!」

正義は音撃鼓を連打していき、剛の内部に清めの音を叩き込む

その途端、剛の余裕の表情が変わり、苦しみの表情になっていった

彼女の妖力では殺すことはできないが、確実に倒せる

正義は連打し終わると、音撃棒を大きく構え

正義「ハアアアアア、ダアツ!!」

そのまま最後の一撃を叩き込む

その瞬間、剛の腹に広がった音撃鼓は爆発した

ここで言いますが本来なら、音撃鼓は魔化魍と共に爆発するのである

清めの音が効いたのか剛はそのまま動じず、固まった状態で倒れた

………勝った

ついに、鬼城剛を倒す事ができた

と同時に正義は、体の限界により同じく倒れ込んでしまった

ダメージを受けていた疲労を耐え抜いていたが、戦いが終わったことによりその疲れ

がドツと出てきのだ

正義「あ……ああ………」

正義の意識は薄まっけていき、そのまま闇へ……

続く

第十七話 戦いの後

現在の時間帯：夜

正義「うっ……うーん……」

気がつくくと、辺りは若干湿っぽい感じになっていた

冷たいゴツゴツとした岩肌

真つ暗な空間

この事から正義はここは洞窟だという事が理解した

しかし、ここで正義は疑問になった

先程までは、陽の光が注ぎ込む砂の世界の中にいた筈が、目を覚ました場所はが洞窟はおかしい

自分が気絶をしていたらどこにも行けないから尚更であつた

さらによく見てみると、手当てした後が鬼の姿から元に戻つた体にあつたとなれば考えられるとなると、誰かが運んできたしか思いつけない

？「おお、目が覚めたのか」

正義「!？」

いきなり洞窟の奥から声が聞こえてきた

正義は振り返ると、先程まで暗闇だった奥の空間に光が入ってきた

そこにいたのは、蠟燭の光に怪しく映し出された鬼城剛であった

正義「どうしてあなたが？ここは…一体……」

剛「ああ、ここは一応、私の住処だ」

正義「あなたの？」

どうやら正義は剛の住処（仮）に連れてこられたそうだ

先程まで戦っていた筈なのだが彼女は正義に対して今は敵対してない様だ

剛「ふふっ、この前の戦いにはとても満足したぞ」

どうやら、あの戦いに満足しているようだ…

ん？ この前？

先程まで自分は戦いを行っていた筈が、剛が言った言葉はこの前であった
そこで、正義は一つ質問した

正義「あの……あの戦いからどのくらい経つのでしょうか？」

剛「ん？あああの戦いからは2日はお前は眠っていたぞ」

正義「えっ!？」

正義は自分が丸2日も眠っていたことに驚きを見せていた

その2日の間に剛は先に目を覚まし、正義を自分の住処へと運んだ様だ
なぜ戦い相手である筈の彼を運んだのかはわからないが

正義「僕をどうするつもりですか?…まさか僕を食べるつもりですか?」

剛「はっ?どういう事だ?」

正義「いやっ?だって僕を食べる為に、ここへ連れてきたのでしょうか?」
すると剛はきよとんとした表情になっていた

もしや何か癩に触る事を言ってしまったのか?

僕はすぐさまいつでも攻撃を防ぐ体制に入り、剛の様子を見る

剛は暫く硬直していたが、やがて震え出して……

剛「……………フツ」

正義「ほえっ?」

剛「フハハハハハハハッ!!」

なぜか笑い始めた

何故かはわからないが、僕の顔が真っ赤になってしまった

正義「なっ！何笑っているんですか!？」

剛「いやwお前の発想が可笑しくてなw。私が食べるとしたら私に負けた者で、私に勝った者は決して食べてはしないぞw」

ああ、そういうことか

僕は剛に勝ったから食べられる事はなかったのか

あ、やばい。めっちゃ恥ずかしくなってきた



あれから正義は鬼城剛について色々と質問をした

彼女は鬼の中でも頂点に立つ『鬼子母神』と呼ばれる鬼との事

鬼子母神と言えば、前世での歴史の授業で、インドにいる仏法を護る守護神で同じ名前がいたことを思い出した

正義はその事を質問したが、どうやら彼女はその守護神とは全くの別人(?)だったと質問をしていた正義であったが、彼女の顔が次第に赤くなってきたのが見えていた

正義「あ、あのく剛さん？」

剛「ん？どうしたのだ？」

正義「どうしたのですか？風邪でも引いたのですか？」

多分そんなもんだらうと正義は信じていた

信じて

剛「ああ、ちよつとお前に欲情してしまっただけだ」

どうしてこうなった

気がつくと、正義は剛に持ち上げられてしまった

正義「えっ!?!ちよっ!?!」

剛「すまないな、私はお前の様な強いやつは好みタイプでな、やられた後からずつと犯したかったんだ」

正義「いやいやいや!!何『犯す』って!?!怖い怖い!!」

剛「おっ♪お前やつぱり初つづだったのか。まあ、こんな子供だからなあ♪」

剛はそのまま正義を持ち上げた状態で、洞窟の壁(?)に手を翳した
すると、その部分が消えて紫色の空間(ベット付き)が目の前に現れた

正義「なっ！何する気なの!?!やめてよお!!」

剛「すまないが、こればかりは拒否権はなしだ」

正義「ああアアあまりだアアア!!」

正義は某腕を切り落とされた人みたいな表情で、悲痛な悲鳴を叫んだ

だが、この世界の生き物は、正義と剛以外は全て滅んでいるため、誰も助ける事はなかった

そのまま二人が入った瞬間、部屋の入り口が消え、剛に乱暴されてしまった



剛「ふう、正義、やっぱりお前は私の好みタイプだったぞ♡」

正義「シクシク（涙）」

二人は真つ裸の状態でベットに入り、何かのプレイを行い終えていた

剛の肌は若々しくなっておりご機嫌がいいのかどこからかタバコ擬きを取り出し吹かして、正義はなんともなつてはいないが何か大切なものを失った表情になつており泣いていた

このままではヤバイと思つた正義は逃げ出そうとしたが、そのまま剛に捕まり、ベットに連れ戻されてしまった

剛 「ほらっ！もう一回行くぞ♡」

正義 「やめて、もう無理だよ（涙）」

剛 「やめないぞ！今日からお前は夫となるのだから♡」

正義 「ウワアアアア！」

正義は不味いスパゲッティを平気に食べる人みたいな顔でさらに悲痛の叫びを叫ん

だ

月夜見様……ごめんなさい……

月夜見様の恋を受け取ったのに……

僕、鬼に負けてしまいました……

続く

三章 数億年後の世界にて

第十八話 復活した世界にて

鬼城剛と五十嵐正義の戦いから数億年の時間が経っていた

砂の世界と化していた地上は時間が経過するに連れて、土は水で潤い、小さな芽が生え、その芽は木へとなり、再び世界は緑に生い茂っていた

そしてそこから、新たな生物の命が生まれ、進化を遂げていった

そして今日までで、かつて消え伏せてしまった人も妖怪も再びこの地上に現れ、

そんな中、僕こと五十嵐正義はカービィと共にこの世界を探検していた

えっ？ロケットか何かを作って、早く月へ行ったらだつて？

いや、それはしたいんだけど、やっぱり僕この世界はどんな感じなのかを見たいし、何より月に行くのがちよつと怖い……

だつて多分、永琳お姉様達は絶対に僕のことには死んだと思っちゃっているし、もし月に行ったら何か恐ろしい事が待っている様な感じがする

そう思うだけで、僕の体は身震いを感じていた

という訳で、すぐに月へは行かずに、この世界を探索して、満足したらロケットかハルバードで月へ行こうと思っている

あつ！ちなみに剛からは全速力で逃げてきました☆

正義「ふう〜、やっぱり森の中って気持ちいいなあ〜♪だよね、カービィ？」

カービィ「ぷいっ」

現在、正義は上機嫌でカービィと森の中を歩いていた

やっぱり森は、空気も綺麗だし、何より涼しい事から正義は上機嫌であった

と思っていたが、正義の横から数人の妖怪が出てきて、前に立ちふさがってきた

うげっ！鼻が曲がりそうな匂いだ!!

これは絶対に風呂呂に入っていない奴だろう

妖怪「おいおいおチビちゃん、こんなところで何してるんだ？もしかして俺らに食べ

られに来てくれたのか？w」

今まさに食べ頃のリングを食べようという感じで正義を見続ける妖怪達

うわっ、しかも涎垂らして気持ち悪っ!!

とりあえず戦闘態勢に入っているカービィであるが、まだコピーを扱えるほど強くな

いので、亜空間収納の中に避難させた

正義「そんなに食べたければ良いよ。僕を倒せたらね！」

そういつて正義は、メモリを挿入させるスロットが二つついたドライバー、『ダブルドライバー』を取り出し、腰に装着した

すぐさま亜空間収納から二つのメモリを取り出し、スイッチを押す

『CYCLPNE!』『JOKER!』

そのメモリは『ガイアメモリ』、ある仮面ライダーに登場するアイテムにして、ダブルや怪人に変身するのに必要な変身アイテムだった

その仮面ライダーの世界では、ガイアメモリは「ミュージアム」と呼ばれている悪の組織が製作したアイテムで、怪人になる為には、メモリを入れた銃型の装置で『生体コネクタ』を体に刻む手術が必要になる

その手術のおかげで、怪人に変身可能となるが、普通の人間がメモリを使うと、強大な力飲み込まれたり、メモリに含まれる毒素により精神と肉体が蝕まれ、暴走してしまいう危険性がある

そんな中、この仮面ライダーが使うメモリは次世代型メモリと呼ばれており、メモリの毒素を可能な限り廃し純化されており、ダブルドライバー等の変身アイテムで変身する事で、毒素に悩まされずに戦うことができる

ちなみにこの仮面ライダーに変身するには、二人必要である

そう、今正義一人しかないのだ

正義はスイッチを押しした瞬間二つのメモリをドライバーに挿れ、バツクルを展開させる

正義「変身！」

ガチャッ

『CYCLONE!』 JOKER!』

その瞬間正義の周りに風が発生し、その周りにあつた微量な物質が体を覆い、変身完了した

見た目は、右が緑色のソウルメモリ、左に黒色のボディメモリを身に包み、その首にはマフラーの様なものがついていた

その姿こそ、ガイアメモリの力で変身する仮面ライダー『^{ダブル}W』であつた？ 『おいおい、なぜ私まで変身しなければならないのだ？』

正義『だって、Wは二人で一人の仮面ライダーだもん『零龍』さん』

緑のボディから聞こえてきた声は、正義の内部にいる龍神、零龍であつた妖怪「なっ!?なんだテメエはっ!?」

正義『知らないなら教えてあげるよ。僕……いや、私たちは二人で一人の仮面ライ

ダー……『^{ダブル}W』だ!』

妖怪「ふざけやがって!! やっちまえ!」

その妖怪の言葉により、周りにいた妖怪たちが一斉に襲いかかってきた
それでも正義たちは冷静に……

正義『零龍さん、あのセリフ行きますよ♪』

零龍『やれやれ、わかったぞ……』

正義&零龍『さあ、お前たちの罪を数えろ!』

そのセリフを言え終えた瞬間、まず目の前まで来ていた妖怪を回し蹴りで蹴り倒し、
すぐさまジャンプをして他の突進攻撃を避けた

蹴り倒した妖怪は、既に息絶えており、その体から赤い液体が滲み出していた

妖怪「てめえっ!! 野郎ども、ぶち殺せっ!!」

すると妖怪達は、自分の持つ力で光の玉を沢山放出してきた

長年でわかってきたのだが、この光の玉は『弾幕』と呼ばれており、かなりのダメー
ジを与えることが出来る攻撃方法であった

弾幕は、霊力・魔力・妖力・神力が持つ者であれば、出来る攻撃である為、多くの妖
怪と神は戦以外はこの攻撃をしている

また、強い力を持つ者であれば、弾幕で強い技を発動させることが可能であったよしつ、今度弾幕を研究して、自分だけの技を作ってみよう

そうすればライダーに変身しなくても、妖怪退治できそうだから取り敢えず、目の前にいる汚い妖怪達を しておこう

正義『零龍さん、赤色のメモリを取り出して、スロットにセットしてください。僕は灰色のメモリを入れますので』

零龍『わかった』

すぐさま、バックルを閉じ、スロットに入れた二本のメモリを抜き取り、赤色と灰色のメモリのスイッチを押した

カチャツ

『HEAT!』『METAL!』

そのままメモリをスロットに挿れ、バックルを再び展開させた

『HEAT!』 METAL!』

すると、緑と黒のボディが赤と灰色のボディへと変化し、灰色の手には長い棒の様な武器、メタルシャフトが生成された

この姿は炎と闘士の力で相手を倒す仮面ライダーW『ヒートメタル』であった
妖怪「なっ!?姿が変わっただど!」

正義たちはすぐさま、メタルシャフトを一匹の妖怪の頭に打つ叩いたすると、叩かれた妖怪は真つ二つに割れて、肉塊が周りに飛び散った

これには流石の正義も、吐き気がするほどの気持ち悪さであった

そして、その光景を見た他の妖怪たちは、怯え始めてしまった

さらに正義たちは、一体の妖怪へと走り出した

気づいた妖怪は返り討ちとして、攻撃をするが避けられ、足をメタルシャフトに叩かれた

そのまま倒れた妖怪に向けて、そのままメダルシャフトを突き刺し、倒した妖怪「なっ！何だよこいつ、化け物じゃねえか！オメエら、逃げるぞ!!」

これ以上戦っても、勝ち目がないと思ったのか、逃げ出す事にした妖怪たちしかし、正義たちはそれを阻止してしまった

正義「殺しに掛かっておいて、逃げるなんて事、させないよ？」

正義たちは、すぐさまメダルシャフトのスロットにメタルメモリを差し込み、必殺技を発動させた

『METAL! マキシマムドライブ!』

すると、メタルシャフトの両先端に、燃え上がる炎が現れた

その炎は益々大きくなり、必殺技の準備ができた

正義&零龍 「喰らえ！メタルブランディング！」

正義たちは燃え上がる炎を相手に目掛けて横に振った
すると、炎は逃げ出した妖怪に目掛けて飛んでいった
そのまま炎は妖怪に命中し、体が炎に覆われていった
妖怪「グワアアアアアツ!!熱い!!熱いーっ!!」

そのまま燃え続けていたが、やばて妖怪の息はそのまま引き取り、残った体は灰と化
してしまった

正義 「よしっ!!勝ったぞお!!」

零龍 「しかし……我々のしている事、結構エグいなあ」

正義 「……まあ、そうだね。ライダーもあまり重大なこと以外は使うのはやめておこ
うかな(汗)」

勝利はしたものの、命に関わる様なこと以外はライダーの力を使わないことを誓った
正義であった

続く

第十九話 とある話

妖怪を倒してしばらくしたある日。

いつもの様に旅をしている正義とカービィ。

今日はいつもの白衣を身につけずに、自ら作った装置で、新たな衣服を大量生産した。今回はその中の一枚、短パンに黒いパーカーを身につけ、その下はどっかのバンドの一人が、インパクトがあるポーズをして、文字に『夜は焼肉っしょく！』と書かれたTシャツを着ていた。

しばらく歩いていると、前方に村が見えてきた。

この頃になると、各地に村が出来始めて、人間にとっては安全な地域となっていく。正義「よしっ！今日はあそこで泊まることにしよう」



村に入ってみると、見た感じでは規模はかなり大きく宿も沢山ある。

という訳で、正義は宿の一つを取る事にした。

ちなみに金は、妖怪討伐の報酬の一つで払っていた。

この頃になると、妖怪が頻繁に人間を襲うことが多くなり、その為妖怪を倒す力を持った人間に討伐してほしいという人がかなり増えてきた。

しかし、有力な力を持つているとしても、討伐成功できるのは僅か。

まあ、僕はライダーの武器を使って、討伐してるんだけどね。

さすがに、最近の妖怪は数億年前とは違って弱かった（正義思考）

そんな相手に、ライダーに変身して倒すとなると、こつちがまるで怪人っぽくなるから、武器だけで倒していた。

……えっ？ 前回『W』^{ダブル}になって、妖怪を倒してたじゃないかって？

ねえ、この台詞知ってる？

??? 「バレなきや犯罪じゃないんですよ」

とまあ、それは置いといて、数億年間僕はライダーの武器だけで、妖怪の討伐をしていったり、時折お宝なんかも獲得して、何とか金銭的は解決している

さて、宿をとった正義は、夕食をとる為にどこか飯屋を探していた

正義のTシャツを多くの人の視線を感じながら

そして、団子屋を見つけて、今日はここで食事をすることにした

正義「すみませーん」

店員「はいはi:っ!!」

正義「団子20個ください」

店員「はっはい」

店員は注文を取りに店の奥へと行ってしまった

正義を見て、若干吹いたことは正義は知らずに

店員「お待ちどうさま」

正義「ありがとうございます」

団子20個が運ばれてきて、正義はそれを黙々と口に頬張り始めた。

うん、美味しいなあ……

前世の時代とは若干違いがあるけど、米の甘さがあつて本当に美味しいや。

ちなみにこの時、人々の目を盗んで、亜空間収納に団子を10個入れ込んだ。

だって、カービイにも食べさせたかったから。

と団子を食べ続けていると、

「おいおい、またかよ」

「これで13人目だぞ」

「もうダメだ…おしまいだあ…」

店の前で人集りが出来ていた。

ていうか、今へタレ王子がいたぞ。

正義「ん？何かあったのかなあ？」

正義は先ほどまでであった10個の団子をすぐに平らげ、店員に金を渡すと、すぐに人集りに向かって行った。

『妖怪を倒し、頂点を極めるのは興味深い…！』とか言つて、討伐に行った陰陽師があつさりと頭から食われてしまったそうだ」

『この前なんか、『俺、この戦いが終わったら結婚するんだ』とか言つてたのもいたが、同じく食われたぞ」

『どうするんだよ…このままでは、村を襲われる可能性が高いぞ！』

なるほど、どうやらこの付近で人喰い妖怪が、討伐に行った陰陽師を倒しているみたい。い。

ていうか、その倒された一人に絶対蟹刑事みたいなのがいるよ。

それにしても、人喰い妖怪かあ……。
正義「ちよつと面白そうだなあ♪」
正義はそう言い、その場から離れた。

続く

第二十話 宵闇の妖怪

どうも、皆さん。

いつもニコニコ あなたの隣に 這い寄る博士、五十嵐 正義、です！

なんちゃって、ただいま現在の時刻は恐らく深夜10時あたり、森の近くまで来ています。

この森は、先ほど村で言っていた人喰い妖怪が住み着く森であった。

場所は、正義がいた村からおよそ300M離れた位置にあった。

意外と村から遠いところだね。

正義がこの森に来た目的は、

？「全ウチュウの 支配者となるのダ！」

正義「KA☆E☆RE」

チュドーンツ!!

正義は、どこかの虚言師のセリフを言う何者かに向かって、トリガーマグナムの引き

金を引いた。

放った場所には爆発が起き、邪魔して来た者は木っ端微塵になっていたと思う。

これで、ようやく例の妖怪探しの再開が

？「ちよつと！いきなり撃つなんて酷すぎじゃないの!!」
できず

突如爆発があつた場所から、真つ黒げになつた女性が現れた。

いや、女性といつても人間ではないことを正義は感づいていた。

体から溢れるかなりの量の妖力……間違ひなく、この女性は妖怪であつた。

それも今まで討伐して来た妖怪よりも、かなりの力を持つ程の。

？「まつたく、可愛らしい人間が入つて来たと思つたら、いきなり攻撃するんだから、

お姉さん怒るわよ！プンスカプン!!」

そんな力とは裏腹に。お姉さんキャラっぷりな感じで、正義を叱つていた。

当の正義はと言うと

正義「だつてお姉さん、妖怪だから♪」

？「えっ!?!それだけで!?!酷すぎる!!」

正義はため息ついて、その妖怪に向かつてこう言った。

正義「ていうか、お姉さんでしょ？最近討伐者を喰らっている妖怪って？」

？「あらっ？もしかして、私を討伐しに来た新たな陰陽師かしら？」
そう言ううと妖怪は焦げた体を払った。

その姿は、180cmの身長で金色のロングヘアーに、その頭に赤のリボンをつけて、
白黒の洋服に黒のロングスカートを身につけていた。

あれ？この時代ではまだ、洋服はないと思うんだが……

？「別にこの服は生まれた時からあったのよ」

正義「どうして僕の心を読めるんですか？」

？「教えない♡」

調子が狂いそうだが、正義はすぐに自己紹介をした。

正義「取り敢えず自己紹介ぐらいはするよ。僕の名は五十嵐正義。世界を旅する『仮
面の戦士』と言った所かな？」

？「へえ……変わった二つ名ね、私はルーミア。『宵闇の妖怪』の二つ名を持つ妖怪よ」
どうやら、この妖怪は闇を操る事ができるようだ。

正義「ついで？どうして自ら僕の前に出て来たの？こういうのって普通なら逃げるはず
なのに」

正義の質問を聞いたルーミアは怪しげな微笑みを浮かべた。

ルーミア「私が正義君の前に来た理由……それは……」

正義「くくりっ」

ルーミア「小さい貴方を食べに来たの」

デスヨネー

それ以外、考えつく事はないもんね。

正義「つまり、これは僕に対しての宣戦布告という事でいいんだね？」

ルーミア「まあ、そういう事になるわね。それじゃあ、楽しい戦殺し合いいを始めましょうか

！」

そう言い、ルーミアは浮遊し始め、戦闘態勢に入った。

よし、この際だから新発明を試させていただこうかな？

そう思い、正義は亜空間収納から何かしらの機械がついたグローブを取り出し、手に装着させた。

正義「これが有れば、生身でもライダーの力を扱う事ができる。さあ、始めましょうか！」

正義はルーミアと同じく浮遊始めた。

正義は、W^{ダブル}での戦闘の後、ライダーとは別の戦い……弾幕や浮遊を練習し、ライダーの力無しでも、空を飛べるようになっていた。

しかし、未だ弾幕に対しては出す事もできなかった。

その為、再び亜空間収納から弾幕放出用銃型の武器を取り出した。

正義「楽しい戦いの始まりだっ!!」

続く